平成13・14年度 (財)日本ハンドボール協会
役員が決定

財団法人　日本ハンドボール協会では、２月24日の評議員会の議を経て、３月10日、平成13・14年度役員を以下のように決定致しましたのでお知らせ致します。

役職	氏名	
名誉会長	齋藤 英四郎	
会長	米倉 功	
副会長	渡邊 佳英	(ＩＨＦ・ＡＨＦ)
副会長	冨田 寛治	普及・全般
副会長	山下 泉	日本リーグ事業・財務
特任副会長	岩井 正樹	アテネ特別強化・プロジェクト21
専務理事	大西 武三	
常務理事	市原 則之	日本リーグ機構会長
常務理事	松原 光三	財務・総務
常務理事	川上 憲太	広報・日本リーグ
常務理事	喜井 美雄	国際
常務理事	角 紘昭	指導・普及
常務理事	江成 元伸	競技運営
常務理事	斉藤 実	審判
常務理事	緒方 嗣雄	強化
常務理事	村松 誠	機関誌・規程
理事	近森 克彦	
理事	福地 賢介	
理事	大川 洋司	
理事	佐分 正典	(10万人会)
理事	大原 康昇	
理事	武田 末男	
監事	大野 金一	業務・法律
監事	竹野 奉昭	全般
監事	殿水 幸雄	会計
参事	駒林 昭三	
参事	千田 文彦	
参事	志々場 修二	
参事	(東海ブロック未定)	
参事	森安 昭雄	
参事	葦原 大三	
参事	山下 勝司	
参事	佐々木 英明	
参事	古屋 正俊	
参事	兼子 真	競技運営・総務
参事	中村 博幸	東アジア
参事	本間 誠章	秋田ワールドゲームズ
参事	西村 孝雄	事務局長・総務・会計

平成13年度事業計画

日本協会では、ハンドボール競技の普及発展のために、全員参加の理念のもと長期計画、短期計画を掲げている。長期計画の内容としては、がんばれハンドボール10万人会、ナショナルトレーニングシステム、普及特別委員会による展開、短期計画としては、アテネ特別強化委員会によるアテネオリンピック出場の必達を目指して展開することである。

各事業部では、現在日本のスポーツ界が企業チームのスポーツから相次ぐ撤退など、その環境はますます厳しいものとなっている中、これらの目標を達成する為、その事業予算を合理化・効率化し、各事業を展開する。

さらに将来を見据え、スポーツ環境の変化、スポーツ界の構造改革に伴いハンドボール球界の再編成を視野に入れ、活動を展開する。

1. 普及・指導に関する事業

普及関係

【基本方針】

1. ビーチハンドボール関係
   ①ビーチハンドボールの普及
   ・全国大会の開催（関西地区）
2. スポーツ少年団からマスターズまで生涯ハンドボール体系の確立
   ①ジュニア（小学生を中心として）チームの育成
   ・郡市町村ハンドボール協会の設立促進
   ・市町村協会でのスポーツ教室開催・スポーツクラブの育成
   ・チーム創設マニュアルの作成
   ②小学校の教科ハンドボールの普及施策
   ③小・中・高の教科体育における一貫指導体系
   ④マスターズハンドボールの普及
   ・全国大会の日本協会主催
   ⑤車椅子ハンドボール等の支援
3. 中学生委員会関係
   ①全チームの登録達成
   ②指導者の育成

【重点施策】

1. 小学校教科ハンドボールの普及と次期指導要領の改定に向けて
   ・全国的な研究授業の促進
   ・発育発達に応じた指導マニュアルの原案作成
   ・全国的な実践研究発表会の開催
   ・研究指定校制を検討する
   ・指導者講習会の開催
2. 中学生指導者の育成とNTS組織との連携
3. 生涯ハンドボールを行える基盤の確立
   ・都道府県協会、市町村協会におけるスポーツ教室の開催
   ・都道府県協会、市町村協会における小学生を含むハンドボールクラブの設立
4. 秋田ワールドゲームズ・ビーチハンドボールの成功（8月23日～27日）
   ・運営、日本代表選手の強化、ルールの確立
5. ビーチハンドボールの普及
   ・各地区大会の指導助言、体験講習会の開催、審判員の養成

指導関係

【基本方針】

1. 指導者の育成
   ①コーチレフェリーシンポジュウムの開催
   ②公認コーチ養成講習
   ③指導組織の整備
   ④大学におけるC級コーチ専門教科認定コースの設置について
   ⑤都道府県におけるスポーツ（ハンドボール）指導員の養成
2. 公認コーチ資格の義務づけについて
3. 海外派遣による研修と情報収集
4. 全国指導者委員会の開催
5. 技術・指導情報の広報
6. NTSとの連携

【重点施策】

1. スポーツ指導員・ハンドボール養成講習会促進
2. 平成13年度公認コーチ・レフェリーシンポジュウム

2. 競技運営に関する事業

【基本方針】

1. 日本協会主催、共催の大会管理・運営に当たる
2. チーム、チーム役員、選手登録制度の充実を図り、競技運営に反映させる。
3. 競技用具の整備を図ると共に、競技用具検定制度を充実させる
4. マッチバイザー制度の充実を図る
5. 予定されている国際大会（東アジア大会、ワールドゲームズビーチハンドボール）の推進、運営に当たる。

【重点施策】

1. 東アジア大会、ワールドゲームズビーチハンドボール大会の運営に当たる
2. 競技者登録の推進を図ると共に、登録業務の円滑化を図る
3. 継続したマッチバイザー制度の充実を図る
4. 各種競技用具の開発を図る

■全国大会の開催

・第42回全日本実業団選手権大会
  男・女　7／12～15
  大阪府：大阪中央体育館他
・第20回全国クラブ選手権大会
  （東）　7／27～29
  福島県：本宮町総合体育館他
  西日本大会　未定
・第14回全国小学生大会　8／4～5
  京都府：京田辺市中央体育館
・第44回全日本教職員大会　7／25～27
  愛知県：豊田市体育館
・第9回マスターズ大会　7／27～29
  愛知県：豊田市体育館
・第52回全国高校選手権大会
  8／1～7
  熊本県：山鹿市総合体育館他
・第3回ビーチハンドボール
  8／4～ 5　兵庫県：未定

・第6回ジャパンオープントーナメント　男・女 8／13〜16
高知県：高知県立県民体育館他
・NTS（ナショナルトレーニングシステム）8月予定
・第28回全国高等専門学校選手権大会 8／4〜5
山口県:徳山市総合スポーツセンター
・第30回全国中学校大会 8／18〜21
山口県:徳山市総合スポーツセンター
・第56回国民体育大会 10／14〜18
宮城県：大和町総合体育館他
・第26回日本リーグ 10／23〜3／3
各地
・男子44回・女子38回全日本学生選手権大会 11／14〜18
富山県：富山市総合体育館他
・第53回全日本総合選手権大会 12／12〜15
（男子）東京都：駒沢体育館（予定）
・第10回JOCジュニアオリンピックカップ 12／25〜27 大阪府：
・全日本実業団チャレンジ2002 未定
・第26回日本リーグプレーオフ 3／16〜17 東京都：駒沢体育館
・第25回全国高校選抜大会 3／23〜28
富山県：氷見市ふれあいSP 他

■国内関連大会
・東日本インカレ 8／17〜21
山梨県：小瀬スポーツ公園体育館他
・西日本インカレ 8／8〜12
福岡県：アクシオン福岡　他
・第56回国体ブロック大会
8月／上旬〜 各地

■国際大会
・東アジア競技大会 5／20〜26
大阪府：住吉スポーツセンター
・アジアナショナルサーキット
5／12〜17 近畿地区
・第7回ひろしま国際大会 7／26〜29
広島県：東区スポーツセンター
・第9回日・韓・中ジュニア交流競技大会
8月予定　中国
・第5回日韓スポーツ交流（派遣・受入）
8月予定　韓国・大分県予定
・第13回女子ジュニア世界選手権
7／29〜8／12 ハンガリー
・第13回男子ジュニア世界選手権
8／19〜9／2 スイス
・第15回女子世界選手権
12／2〜16 イタリア
・ジャパンカップ（予定）
8／25〜9／1 各地

3. 国際に関する事業

【基本方針】
1. 世界大会（オリンピック、WC）出場に向け環境づくり
2. アジアハンドボール連盟（AHF）の更なる正常化
3. 国際交流の体制定着と発展

【重点施策】
1. AHF・IHFの重要ポイントに役員を送り込む委員会も含め登録し、日本主導で進める
2. アジア東地区（日・中・韓）の連携を密にする
・3ヶ国交流会議の実施 3回／年
・イベント時の交流会の実施　随時
3. 海外拠点と国際交流のバックアップ
・派遣選手の送出しのアシスト
・海外拠点国との調整
・海外招聘国への調整

4. 競技規則（審判）に関する事業

【基本方針】
1. 審判員の資質の向上
トップレフェリー研修会を実施し、資質の向上を目指しているが、研修会を継続することで、プレーヤー・コーチとレフェリーの距離を縮めなければならない
2. 改正ルールの伝達
2001年は、IHF競技規則改正の年度であり日本は、2002年4月1日改正実施の予定である。事前の伝達を徹底しなければならない
3. 審判員の評価
研修会・講習会の成果、また課題の発見に評価（審判技術）の継続

【重点施策】
1. トップレフェリー研修会
平成12年度は、日本リーグ担当レフェリーにも枠を拡げて実施した。参加者にとっては、経済的負担が大きかったが実のある研修会であり、本年も中身の充実を図り実施する
2. 継続的行事の実施
A・B級審査、評価、JHAレフェリーコース、合同委員会等は、審判部運営上避けられない

5. 競技力向上（強化）に関する事業

【基本方針】
1. 短期（アテネプラン）強化施策の推進
2. 平成13年度各ナショナルチーム強化計画に基づく強化施策の推進
3. NTS（ナショナルトレーニングシステム）による一貫指導の強力展開と充実定着化
4. 女子ナショナルチーム、ジュニアナショナルチーム世界選手権大会での上位入賞を果たす為の強化施策の推進
5. 男子ナショナルU－23・19は、アテネプランに基づいた強化推進
6. メディカルサポート体制を充実し、各ナショナルチームがトップコンディションで試合ができる支援の充実
7. フィットネス（JOC強化指定選手の体力測定及びチェック）とアンチドーピングの推進

【重点施策】
1. 短期（アテネプラン）に基づく強化施策の実施
2. 平成13年度各ナショナルチーム強化事業として国際大会への出場、海外遠征及び国内強化合宿などの計画的な実施
3. NTSに基づく一貫指導の実施及び指導内容の充実を図る
①指導グループ研修会の開催（指導方法の統一）
②全国でのブロックトレーニングとそのトップ選手を集めたセンタートレーニングの実施
③医科学委員会のフォロー体制の充実
4. 世界選手権大会での上位入賞と世界のトップチームとの国際試合の実施
①女子ナショナル、ジュニアナショナルの世界選手権大会の上位入賞
②男子ナショナルのアテネプランに基づいた世界のトップチームとの国際試合の増加を図りチームの向上を狙った強化施策の実施
5. 医科学研究グループは、フィットネス体力の適性研究、メンタルマネージメント等の実施
6. 特別研究グループは、メディカルチェック、体力測定、ドーピングコントロールなどの実施

6. 機関誌発行に関する事業

【基本方針】

機関誌は、協会より情報発信の一つとして位置付けられるが、この点に於いて更なる充実を目指していく。さらに、加盟団体からの情報も積極的に発信して行く為のシステムも考えていく。

内容的には、日本協会の重点施策に沿い情報を整理・発信していく。

また、全員参加の理念によりOBを含め、機関誌を通じて支援を呼びかけていく。

【重点施策】

1. 各全日本大会詳報
2. ナショナルチーム情報
3. NTS関連情報
4. 「10万人会」情報
5. 協会だより
6. 各事業報告
7. 人物登場

7. 企画・広報に関する事業

企画関係

【基本方針】

1. 中・長期スケジュールに基づく企画・立案
2. 協賛募集活動の定着と拡大
3. 「JHA21世紀ビジョン」の立案

【重点施策】

1. アテネプランに伴う企画・立案
2. 協賛募集活動の拡大(協賛パンフレット他)
3. 「JHA21世紀ビジョン」の具体的立案作成

広報関係

【基本方針】

1. 恒常的な広報活動計画の推進
2. メディア媒体への積極的アプローチ
3. ハンドボール文化の高揚(全員参加の啓蒙活動)
4. ナショナルチームのPR
5. インターネットによる情報発信の拡大

【重点施策】

1. メディアとの定期懇談会の実施
2. 記者会見・プレスリリースの機会の増大
3. メディア(TV・ラジオ・雑誌他)への積極的発信
4. ナショナルチームのPR
5. ハンドボール全員参加の啓蒙活動の支援
6. インターネットの中身の充実と拡大

インターネット関係

【基本方針】

1. インターネットによる情報発信量の拡大

【重点施策】

1. インターネットによる日本協会・日本リーグのホームページ充実
2. 各イベントの告知・結果の伝達のさらなる充実

8. 財務・会計に関する事業

【基本方針】

日本の少子化傾向・クラブ活動の停滞。そして日本経済の伸び悩み現象は日本ハンドボール界に於いても、大きな影響を受け、競技者登録人口の減少企業チームの活動停止、協賛企業の撤退等による収入財源は縮小の一途を辿っている。然るに、幅広い収入源の確保と経費支出の厳正化、効率化がより一層求められる。その一方で長期ビジョンに基づく競技の活性化、底辺の拡大に対する投資が必要と考えられる

【重点施策】

1. 「がんばれ10万人会」の更なる発展を目指し、財源を幅広く求めると同時に、ハンドボール界の活性化を目指す
2. 普及事業に投資を拡大し、競技人口の活性化を目指す
3. 会計処理の厳正化をより進め、権限・責任、そして事務手続きの明確化を進める
4. 登録金の全般的な見直しを行う

9. 日本リーグに関する事業

【基本方針】

1. 日本リーグ機構(21世紀に向けての改革)
   - ①地域と共に発展する日本リーグ
     - a. 行政、体協、諸団体、市、町民を取り込んだ活動
     - b. 地域貢献(地域活動への積極的参加、ハンドボール教室などを恒常化し、普及、発展に貢献し、子供たちへの夢を育てる)
   - ②企業内でのチームの位置づけの明確化
     - a. 経営者や社員、そして取引先の企業に対し、積極的なチーム活動の情報発信
       - →企業活動の効果
         - メディア露出度
         - 地域活動
         - ホームページ
   - ③アテネ強化特別委員会との連携と支援体制の確立
     - オーナー会議の実施
   - ④10万人会の発展・活性化にむけ、各チームの役員・選手が積極的に支援

【重点施策】

1. 観客動員対策
   各チームの具体策の分析と指導
2. メディア対策
   - a. 記者クラブハンドボール部会やNHK、各TV局との交流
   - b. チーム情報を活発に発信(小さな情報でも可)
3. 東京地区でのリーグ戦開催をどうするか
   メディア集積地でのリーグがないことへの危機感
4. 集中開催の取り組み(経費節減を考慮しながら試合数を増加させる
5. 第3地域の開催に積極的な参加
6. NTSを活用した地域活動
7. 21世紀にあるべきリーグの未来像の検討
   - ①スーパーリーグ構想の具現化
   - ②3回戦総当り(ホーム、アウェー、第3地域)
   - ③東アジアリーグ(日本、中国、韓国)
8. 審判技術の向上(日本リーグで国際級のトップレフェリーの育成)

10. 総務に関する事業

【基本方針】

(財)日本ハンドボール協会の円滑な運営のための、諸施策を講じる。また、諸会議の円滑な運営の為に、連絡網・システムの構築を図る。

「がんばれ10万人会」は、細部を見直し、今後を見据えたシステムに転換していくことを目指す。

【重点施策】

1. 諸規程整備
2. 「がんばれハンドボール10万人会」推進

2001年度　国内・国際大会日程（予定）

	大　会　名	開催日程	開催地	開催場所
4月				
5月◇	アジアナショナルサーキット・男子	5/12日(土)~17日(木)	近畿地区	神戸・京都・奈良・滋賀
◇	東アジア競技大会・2001大阪	5/19日(土)~26日(土)	大阪府	住吉スポーツセンター
6月				
7月	高松宮杯 第42回全日本実業団選手権大会	7/12日(木)~15日(日)	大阪府	大阪中央体育館 他
	第21回 全国クラブ選手権大会・西	未定		
	第21回 全国クラブ選手権大会・東	7/27日(金)~29日(日)	福島県	本宮町総合体育館 他
	第44回 全日本教職員大会	7/25日(水)~27日(金)	愛知県	豊田市体育館
	第9回 マスターズ大会	7/27日(金)~29日(日)	愛知県	豊田市体育館
◇	第7回 ヒロシマ国際大会	7/26日(木)~29日(日)	広島県	東区スポーツセンター
◇	第13回 女子ジュニア世界選手権	7/29日(日)~8/12日(日)	ハンガリー	
8月	高松宮杯 第52回全国高校選手権大会	8/1日(水)~7日(火)	熊本県	山鹿市総合体育館 他
	第2回 全日本ビーチハンドボール選手権大会	8/4日(土)~5日(日)	兵庫県	
	第28回 全国高等専門学校選手権大会	8/4日(土)~5日(日)	山口県	徳山総合スポーツセンター
	第14回 全国小学生大会	8/4日(土)~5日(日)	京都府	京田辺市中央体育館
	西日本学生選手権大会	8/8日(水)~12日(日)	福岡県	アクシオン福岡 他
	第5回 日韓スポーツ交流（派遣）	8/11日(土)~16日(木)予定	韓国	未　定
	第6回 ジャパンオープントーナメント	8/13日(月)~16日(木)	高知県	高知県民体育館 他
	NTS（ナショナルトレーニングシステム）	7月~8月予定	各ブロック	
	東日本学生選手権大会	8/17日(金)~21日(火)	山梨県	小瀬スポーツ公園体育館 他
	第9回 東日本小学生大会			
	第30回 全国中学校大会	8/18日(土)~21日(火)	山口県	徳山総合スポーツセンター
	第9回 日・韓・中ジュニア交流競技大会	8月予定 8/23(木)~29(水)	中国	未　定
	第5回 日韓スポーツ交流（受入れ）	8/24日(金)~29日(水)予定	大分県	未　定
◇	秋田ワールドゲームズ	8/23日(木)~25日(土)	秋田県	本荘マリーナ海水浴場
◇	ジャパンカップ予定・男子	8/25(土)~9/1(土)予定	各　地	
9月				
10月	第56回 国民体育大会	10/14日(日)~18日(木)	宮城県	大和町総合体育館 他
	第26回 日本リーグ	10月24日(水)~3月11日(月)	各　地	
11月	高松宮杯 男子44回・女子37回 全日本学生選手権大会	11/14日(水)~18日(日)	富山県	富山市総合体育館 他
12月	第53回 全日本総合選手権大会・男子	12/12日(水)~15日(土)	東京都	駒沢体育館
	第53回 全日本総合選手権大会・女子	12/24日(月)~27日(木)	千葉県	国府台・塩浜
	第10回 JOCジュニアオリンピックカップ	12/25日(火)~27日(木)	大阪府	堺市・家原大池
◇	第15回 女子世界選手権大会	12/2日(日)~16日(日)	イタリア	
1月				
2月	全日本実業団チャレンジ2002	2/9日(土)~11日(月)予定	福井県	北陸電力体育館 他
	第8回 西日本小学生ハンドボール交流大会			
3月	第26回 日本リーグプレイオフ	3/16日(土)~17日(日)	東京都	駒沢体育館
	第25回 全国高校選抜大会	3/23日(土)~28日(木)	富山県	氷見市ふれあいスポーツS 他

◇印　国際大会

第16回男子世界学生選手権大会報告

財団法人日本ハンドボール協会強化委員会委員
全日本学生ハンドボール連盟理事長　福　地　賢　介

第16回男子世界学生選手権大会は、2000年12月27日より2001年1月4日まで、ポルトガルのコヴィリアン、グアルダ、ベルモンテ、フォンダンの4都市にて開催された。

11月の抽選前までは、20カ国のエントリーがあったが、直前になって、スペイン、スロバキア、ブルガリア、ウクライナ、ベルギー、ナイジェリアが棄権し、さらに、予選リーグ開始前にモルドバが棄権、最終的には13カ国で争われた。

優勝は予選リーグで安定したチーム力を見せたハンガリーが、準決勝リーグでトルコによもやの1敗を喫したものの、得失点差で勝ち上がり、予選リーグ・準決勝リーグを無傷で勝ち上がった地元ポルトガルとの間で争われ、ハンガリーが第一延長終了時に左腕エースTamas　Mocsaiのノータイムフリースローが決まる劇的な勝利で優勝（2位ポルトガル、3位ロシア、4位ユーゴスラビア)、日本は11位であった。

予選リーグは、ハンガリー・ユーゴスラビア・アルジェリア・日本のA組に入ったが、前回大会の優勝国・2位国が同じグループという疑問の残る抽選の結果であった。

ハンガリー・ユーゴスラビアには対等な戦いであったが、残り5分の勝負処でだめ押しできずに敗れる結果となった。アルジェリアには快勝したものの1勝2敗で予選リーグ突破ならず順位決定戦回りとなった。順位決定予備戦ではルーマニアに敗れたため、11位決定戦となり、中国を27対25で破って、なんとか11位となった。当初の目標を大きく下回る不本意な成績であった。しかし、その中にて宮崎選手（日体大1年)が、チャイニーズタイペイのSHENG選手と最後まで得点王を争って、惜しくも4点差で2位となった活躍や、他の面も合わせ高く評価され、ロシア・ユーゴスラビア・フランス・トルコ・ルーマニアの上位国選手を抑えて11位(SHENG選手は7位)の日本から、センタープレイヤーとして日本人男女を通じて、初めてベストセブンに選ばれるという快挙があった。これは、宮崎選手が如何に高く評価されたかを物語っていると言える。また、これによって、ある面でのオフェンスの方向性の一面も見られたような印象を受けた。ちなみに、ベストセブンはハンガリー4名、ポルトガル、チャイニーズタイペイ、日本から各1名が選出されている。

11位と目標達成できなかったが、我々の求めた「より速い攻撃」「攻めの守備」も随所に見られ、今後の大会に期待が持てるところまで来ているという感触を得たが、勝負処の1点の重さをあらためて感じさせられた。また、前半のリードを維持しながら55分間は対等な戦いの中で、残り5分のゲームスタミナとメンタルスタミナの面で、今一つ不足が感じられたので、より速い攻撃の中でのより正確さの追求とスタミナの養成が求められる。上位国であるハンガリー・ポルトガル・ロシア・ユーゴスラビア・トルコには、ある意味での強烈な、また、良い意味での個性的なゲームリーダーがいて、チーム全体の把握と、ゲームの流れを良く読んでいたという印象を受けた。

優勝したハンガリーの場合は、大学の就学年数の違いもある。主将で今回ベストセブンに選ばれたNORERT KUZMAなどは、ハンガリー・ユーゴスラビア・ポルトガルと連続3回目の出場で、世界学生選手権（ユニバーシアード）規程で認められているギリギリの28歳である。ディフェンスの要、ポストプレーヤーのGABOR　TAMASも25歳で、ハンガリーのみでなく、ポルトガル、ブラジル、ルーマニア他でも何人かが見うけられ、ハンドボール経験年数の違いがゲームの中で表れているのではないか。卒業後、1年未満の選手の出場も認められており、この点も今後の課題ではないかと思った。

今大会について、松喜美夫ヘッドコーチも「残り5分で1～2点のリード、あるいは、アヘッドの苦しい時の経験の乏しさが、消極さを招き、余裕も見られなくなり、変にあせりが出てしまった。残り時間と点差、ゲームの流れの理解、また、攻めのディフェンスに努めたが、ポスト・サイドシューターの守り、身体を預けられたプレーの対応、コンタクトプレーの連続による体力的な要因からの集中力の低下がポイントになっていた」と反省点、今後の課題を挙げていた。

松井幸嗣チームリーダーも「速い攻撃を課題にスピードのある動き、速いパスワークの中での相手DFをずらして得点機を作り出すこと、攻めのDFからパスカットや相手ミスを誘発させて繋ぎの良い速攻、ミスを恐れない積極的な攻撃に取り組み、この大会に挑んだが一応のものはできたと思う。しかし、ここで1点が欲しいと思う時に、プレッシャーを受け、その中での正確さを欠いたことが今後の課題として残った」としている。

技術的な分析は、コーチングスタッフからの詳しい報告もあると思うが、センターからのポストへのパスも移動しながらの縦パス気味のバウンドパスの多用なども目立っていた。

オリンピック出場のための世界で通用し得る素材、若手選手の発掘と確認、一貫指導のために、全日本チームの田口監督にU－19→U－23→全日本という一つの流れの中で強化になればと思い帯同を願った。特にディフェンス面を重点的に見てもらったが、大きな成果があり、選手も全日本の監督に指導を受けたということが大きな励みになっていた。

今後も、強化のためには大会のみでなく、合宿他でU－19・U－23が全日本チームと合同合宿をできるだけ多く持つことの必要性を感じた。

大会・開催地状況等に触れてみると、今大会予選リーグの組み分け抽選には疑問が感じられた。テクニカルミーティングやその後に、ロシア、ルーマニア、アルジェリア他から、A組は今回の最激戦組であるが、なぜ、前回優勝の

ユーゴスラビアと同２位のハンガリーがシードされずに同じ組に入ったのか疑問という声が聞かれるように、言い訳がましいが抽選のあやとも言える一面があった。開催地有利の抽選組み分けはある程度納得できるが、このような露骨な組み合わせは初めてであった。なお、ハンガリーもこの点の疑問があり、質問文書を送付したとのことであった。

今回、男子では初めて選手の父兄が応援に来てくれたが、プライベートでスペイン旅行中に、この大会のためにと、わざわざ旅程を変更し、コヴィリアンに寄ってくれて、熱心に応援してくれた佐藤和孝日本協会機関誌委員会委員もいて、大変有り難かった。

今大会も、産業医科大学及び濱脇整形外科両病院の好意にて、高橋良正（ハンガリーのみ）・沖本信和両ドクター、川波賢一トレーナーを派遣していただいたが、健康管理（メンタルケア等含む）、コンディション維持、期間中の選手の発病でも適切な処置対応でも貢献いただき、ハンガリー・ユーゴ・ポルトガルの３大会連続のアシストや、選考強化遠征のロシアの帯同も含め、帯同の積み重ねが選手からの絶対の信頼にもなっており、今ではチームにとっては欠かすことのできない貴重な人材となっている。

この他にも、今回初参加の両審判員をフォローするために、後藤登前国際審判員が帯同していただき、現地でグリンベルガー等にアプローチしてくれるようなこと。外国の指導者、全日本、アンダー23の指導等を研修したいとし、松原日本協会参事や、岩本、瀧川両高校監督のご参加など、何かとサポートしていただき、お礼を申し上げたい。

最後に、役員・選手の派遣に協力いただいた各位、選考・強化合宿から本大会まで、物心両面にて、ご支援ご協力いただいた関係各位に、誌面をお借り致し感謝とお礼を申し上げたい。

第16回男子世界学生選手権大会　男子全日本Ｕ－23（全日本学生選抜）チーム

担当	氏名	備考		
デレゲイションリーダー	福地賢介	日本ハンドボール協会理事・全日本学生連盟理事長		
チームリーダー	松井幸嗣	日本協会男子強化委員長・全日本学連理事・日本体育大学男子監督		
ヘッドコーチ	松　喜美夫	日本協会男子強化委員会・全日本学連理事・函館大学監督		
コーチ（テクニカル）	玉村健次	Ｕ－23コーチ・日本協会強化委員会・湧永製薬株式会社		
コーチ（情報・分析）	田村修治	Ｕ－23コーチ・東海大学男子監督		
アドバイザー	田口　隆	全日本チーム監督・日本協会強化委員会		
メディカル（ドクター）	沖本信和	日本協会医科学委員会・産業医科大学整形外科		
メディカル（トレーナー）	川波賢一	日本協会医科学委員会・横浜整形外科病院		
プレイヤー	**選手名**	**所属学校**	**学年**	**身長**
ＧＫ　１	高木　尚	日本体育大学	４年	１８６cm
ＧＫ　１２	吉田耕平	大阪体育大学	４年	１８５cm
ＧＫ　１６	松村昌幸	福岡大学	４年	１８７cm
ＧＫ　２１	田平龍太郎	日本体育大学	１年	１８５cm
ＣＰ　２	澤田俊祐	国士館大学	４年	１８０cm
ＣＰ　３	小倉　学	日本体育大学	４年	１９０cm
ＣＰ　４	作田幸治	日本大学	４年	１８８cm
ＣＰ　５	太田芳文	日本体育大学	３年	１８６cm
ＣＰ　６	柳本義文	日本体育大学	３年	１６７cm
ＣＰ　７	前田誠一	日本体育大学	３年	１８４cm
ＣＰ　８	豊田賢治	国士館大学	３年	１７９cm
ＣＰ　９	田中秀樹	大阪体育大学	３年	１９２cm
ＣＰ　１０	横地康介	名城大学	３年	１７９cm
ＣＰ　１１	宮崎大輔	日本体育大学	１年	１７３cm
ＣＰ　１３	内田雄士	日本大学	１年	１８２cm
ＣＰ　１４	比嘉　律	日本体育大学	３年	１６５cm
ＣＰ　１５	中谷哲也	中部大学	２年	１９２cm
ＣＰ　１７	窪小谷貴裕	日本体育大学	３年	１９７cm
ＣＰ　１８	猪妻正活	早稲田大学	１年	１７８cm
ＣＰ　１９	中山　亮	茨城県立伊奈高等学校３年		１８５cm
ＣＰ　２０	岩永　生	私立瓊浦高等学校２年		１７８cm
ＣＰ　２２	小野誠嗣	私立久留米工大付属高校３年		１８７cm

✲ 参加選手のコメント ✲

◇ 澤田俊祐（国士館大学４年）CP

今回の遠征でも主将を務めさせてもらったが、強化合宿・本大会を通して、どのような時に、どのようにして士気を高めることができるのか難しさを学んだ。個人個人のやる気、士気をどのようにチームとして一つにし、それを勝利に結びつけるか。それができないと勝てないということを知らされ学んだ。世界学生選手権大会では特に予選リーグの緒戦の大事さを言われてきたが、ラスト５～10分にミスの連続で自滅、逆転されたが、その後の試合も同様であった。自分達でわかっていても同じ結果を招いたのは精神面の弱さ、そして外国チームとの厳しい試合の経験の乏しさがあったと思う。今大会で日本の課題があらためて確認できたが、これを今後のハンドボール活動に生かしていきたい。

◇ 高木　尚（日本体育大学４年）GK

ユーゴスラビアの大会と今回の２回目の大会参加であったが、成績としては前回同様な結果であった。しかし、前大会ではユーゴスラビアもハンガリーも強力という印象であったが、今大会ではユーゴスラビア戦はミスからの自滅で逆転負け、途中の試合展開から勝てる試合をイージーミス等で失ってしまったハンガリー戦と、悔しい思いをした。他の試合でも点差が接近してのプレッシャーのかかる展開であったが緊張感から精神的な余裕がなく、やはりミスで敗れてしまい、スタッフがいつも話している１点の重みを痛感させられる結果となった。この精神的な面の強化が課題と感じ、自分はこれからも実業団でやっていく予定なので、この経験を生かし頑張りたいと思っている。

◇ 吉田耕平（大阪体育大学４年）GK

11位という残念な結果に終わった。しかし、負けた試合は、どれも接戦であり勝つことも可能であった。自分たちの良いプレーは十分に通用したし、それは自信になった。接戦を落としたのは体格やパワーの差もあると思うが、一番大事な差は基本的なことではないか。ハンガリーを代表とする外国の強いチームは、DFについての理解、OFで次に何をすべきか、DF・OFの選手交代一つを取ってみても、基本的なことで誰でもできる誰もがやらなければならないことを理解し、全員が忠実に実行していた。チームのシステムや、決まりの後に個人の力を発揮し良くまとまっていた。日本は好き勝手に個人個人がやっているようにしか見えず、それが敗因であったと思う。中国戦で追い上げられた時に、冷静さを欠いた部分もあり、緊迫した修羅場的な中でも冷静な対応を痛感した。スタッフの方々に言われたが、自分たちにとってこの大会がゴールではなく、通過点であり、この経験を生かし、これからのハンドボール界を盛り上げていきたい。

◇ 松村昌幸（福岡大学４年）GK

日本へ帰ってきて、このレポートを書いてい

ると、悔しい思いが込み上げてきた。予選リーグの試合でも決して歯の立たない相手ではなく、自分たちのミスや精神的な脆さからの敗戦であった。しかし、これが日本の弱さであり、世界との違いかと自分なりに思った。選手同士のコミュニケーション一つを見ても不足は否めなかった。自分たちは、これが良い経験となって、これからの糧としたい。いろいろな国の選手のプレーを見て勉強になったが、合宿初日の海外留学生の話を聞いた時に、日本のハンドボール界が大きく変わろうとしていると感じた。自分たちの今の悔しい気持ちを忘れず、世界と戦う時につなげたいと思っている。この遠征が自分にとりプラスになったことをお世話になった多くの人たちに感謝したい。

✻ 試合結果 ✻

⊙12月29日（予選リーグ）

日　　本 27（13－12 / 14－18）30 ユーゴスラビア

［戦評］開始早々、動きの悪い日本は、19秒にユーゴのエースVadicaにミドルを決められ、1分33秒にもサイドからNenadに決められて2点のリードを許した。しかし、このあたりから段々と動きが良くなり、3分38秒に今大会初の得点を澤田が決めてからリズムに乗りはじめ、宮崎のミドル、豊田の速攻で逆に1点をリード。その後も、宮崎、豊田で加点し先手を取って進んだが、ユーゴも離れず1点をめぐる展開で進み、前半を折り返した。後半に入って1分、サイドからMarkoに決められ13－13となったが、その後も1点を争う緊迫した中で推移した。21分、22分11秒と連続してポストのLjubomirに決められて3点のリードを許した。22分53秒前田、24分18秒宮崎と1点差に追いつき、ここからという大事なときに攻撃ミスが出たことと、ディフェンスのマークが甘くなり、Mirkoに連続ミドルを、さらに28分45秒に30点目のポストシュートを決められてしまった。終了10秒前に前田がミドルを決めたが、27－30で敗れた。（得点：宮崎9、前田5、豊田3、小倉3、澤田2、柳本2、比嘉2、太田1）

⊙12月30日（予選リーグ）

日　　本 35（19－ 7 / 16－10）17 アルジェリア

［戦評］アルジェリアは前日のハンガリー戦で、3－3のディフェンスからハンガリーの攻撃を高い位置で対応する作戦をとり、これで来られると戸惑うのではという危惧もあったが、5－1ディフェンスで来た。開始7秒で前田のミドルが決まり、その後もスピードあるオフェンスで、宮崎、前田、作田、澤田とコンスタントに加点した。この間、ディフェンスも積極的に前に出て防ぎ、さらにSoftaneの7mTを吉田が好捕したり、12分間に1点を許すのみとがんばって、終始日本のペースで、大差で折り返す。後半も速攻、ミドルがコンスタントに決まり、快勝した。（得点：宮崎10、前田7、澤田4、太田4、柳本4、比嘉2、作田1、豊田1、田中1、中谷1）

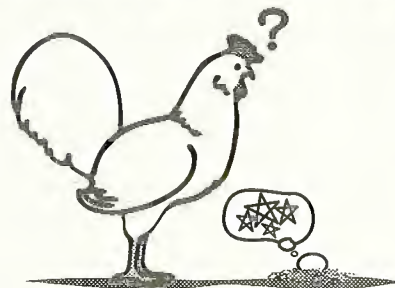
⊙12月31日（予選リーグ）

日　　本 20（9－13 / 11－12）25 ハンガリー

［戦評］ハンガリー学生選抜とは、12月21日にブダペストにて強化合宿のときに練習試合を行い28対27で勝っていた。左腕エースTamasが不在で、この対応がポイントと思われていた。初日のユーゴ戦には敗れたもののこのゲームに勝てば得失点差での準決勝リーグ進出の目もあり、力の入る試合となった。しかし、その気負いが裏目に出てディフェンスのコンビネーションが悪くなった。そこを、対応がカギと思っていた左腕エースのTamasにミドルを決められ先行される。その後は良く守ったが、オフェンスの歯車が噛み合わず、シュートミス、パスミスなどが続き得点出来ない間に4点を連取された。11分、やっと前田のミドルが決まり、その後柳本の速攻や、宮崎、前田のミドルで追いかけたものの、結局、立ち上がりのリードを許した4点差で前半を終了。後半開始早々にポスト、ミドルを決められ6点差に広がったが、これが最後まで響き、24分28秒に豊田の速攻で3点差にまで詰めたが、27分43秒センターFerencにステップ、29分42秒Gaborにポストシュートを決められた。ハンガリーに延べ7人の退場者が出ていたにも関わらず、オフェンスのコンビネーションの悪さや、ノーマークシュートを外すなどし、その点を衝けずに敗れた。（得点：宮崎7、柳本5、前田3、田中2、作田1、豊田1、比嘉1）

⊙1月2日（順位決定戦）

日　　本 24（15－14 / 9－14）28 ルーマニア

［戦評］Adomnicaiにサイドシュートを決められてルーマニアに先行されたが、すぐに小倉のミドルで追いつき、柳本のサイド、前田のミドルで逆転。その後は1点を争う展

開となったが、GK高木の好セーブも随所に出て、前田、宮崎が交互に加点、20分には5点のリードをつけた。しかし、その後、7分間得点できない間に追いつかれ、27分36秒Ovidiuに左45度から決められて同点とされた。その後、1点ずつを取り合い、29分26秒宮崎の得点で1点差をつけて前半を折り返した。後半に入って中谷のポストシュートで先手を取ったが、4分に同点とされてからは、一進一退で1点を争う攻防が続いた。日本は19分29秒に宮崎が決めた後、ルーマニアのGK＝Marcrhisの好守に阻まれ、日本のオフェンスのバランスが悪く無得点の間に、後半出場の松村の再三の好セーブでがんばったが、Burcaのロング、Adomnicaiの速攻、Burcaのミドルでリードされた。28分32秒、比嘉が得点した直後、ルーマニアにJozsefの退場が出た。オールコートディフェンスを仕掛けたが、最後、Burcaに左45度から決められて敗れた。ディフェンダーの消耗が激しく、残り5分の課題が残った。(得点：宮崎10、前田5、柳本2、澤田1、小倉1、作田1、太田1、豊田1、比嘉1、中谷1)

⊙1月4日(11位決定戦)

		前半/後半		
日本	27	13－7	25	中国
		14－18		

［戦評］立ち上がり16秒、豊田の右から中央への回り込みが決まり先行。53秒にJinのカットインから決められ追いつかれたが、小倉のミドル、前田、豊田の速攻の3連取。13分44秒にJinのミドルで6－6の同点にされた。その後は、宮崎の4連続得点などで13得点し、中谷、作田、太田、小倉、前田のディフェンス陣も積極的に前に詰め、GK吉田のファインプレーもあって15分間無得点に抑え、13－7で前半を終了。後半も10分までは順調に加点し、19－10としたが、その後、Shaoのシュートが決まってから中国が反撃に出て来て、11分33秒に前田の退場からJin、Ye、Gong、Zhuとカットイン、ミドルから連続得点されて5点差とされた。その後、宮崎のミドル、比嘉の速攻で離したものの、20分から4分間、無得点の間に、Gongに右45度から豪快に決められて、3点差まで追い上げられた。24分にWangの退場から得た7mTを宮崎が、24分37秒柳本が速攻で決めて再び5点差とした。しかし、この後、ディフェンスもオフェンスも急に足が止まり、29分5秒にYinに決められて1点差まで追いつめられたが、最後に澤田が決めて、前半の貯金で何とか逃げ切った。追い込まれた時のディフェンス陣のリーダー不在と、ルーマニア戦同様に残り5分間の消耗が著しかった。中国が190cm台のガッシリした長身選手が多いのが印象に残った。(得点：宮崎11、前田6、比嘉3、小倉2、柳本2、豊田2、澤田1)

⊙1月4日(3位決定戦)

		前半/後半		
ロシア	30	14－10	22	ユーゴスラビア
		16－12		

［戦評］ロシアはエースMotchalvのミドルをはじめ、Miagkow、Motchalovなどで、多彩な攻撃を見せて、立ち上がりからコンスタントに得点、ユーゴも13分までは、Vuckovic、Djordjevic、Pavlovicなどの長身選手がミドル、ポストを決めて1点を争う展開となった。14分にディフェンスの要である210cmのM. Ognjenovicが、ロシアの速攻時にラフプレーで1発レッドで失格となってからディフェンスのリズムが微妙に狂い、粘りも欠き、連続5得点されて9－4とされ、前半はそのままの点差で終了。終了間際に1点を返したが、14－10で終了。後半に入ってもロシアはコンスタントに加点、快勝して3位を確保した。ユーゴにとっては、M. Ognjenovicの失格が最後まで響いた一戦であった。

⊙1月4日(優勝決定戦)

		前半/後半/延長		
ハンガリー	26	12－3	25	ポルトガル
		9－18		
		(延長)		
		3－2		
		2－2		

［戦評］立ち上がり、お互い堅さが見られたが、3分20秒にMocsaiが右45度からミドルを決めて、ハンガリーが主導権を握った。6分12秒ポスト、9分27秒Kissのフリースロー、10分23秒Kissの7mTと得点。その間GK＝Fulopがポルトガルのノーマークシュートを再三好捕したり、ディフェンスのがんばりでCoelhoのステップが決まるまでの11分30秒間を無得点に抑えた。24分48秒にハンガリーのディフェンスリーダーTamasがラフプレーで1発レッドの失格となったものの、ポルトガルを3得点に抑えて、前半で12－3とハンガリーの楽勝ムードであった。しかし、後半に入り気の緩みかハンガリーに雑なシュートが目立ちはじめ、そこをポルトガルが着実にコツコツと得点し、15分には5点差まで追い上げて来た。その後、ポルトガルは残り5分で3点差まで追い上げると、ディフェンスラインを上げてプレス気味に守り、ハンガリーの焦りからパスミスを誘い2点差にした。25分45秒にハンガリーに退場者が出てオールコートディフェンスで圧迫、スタンドの声援の後押しもあって、27分10秒、29分15秒と立て続けに得点、延長戦に突入。

延長に入って立ち上がりハンガリーが1分右45度、2分サイド、2分18秒速攻と連続得点し優位に立ったが、ポルトガルも3分25秒、4分53秒に得点して1点差で延長戦後半へ折り返した。ポルトガルはミスを誘い速攻に繋げて同点に、48秒に左サイドから得点してポルトガルが初めてリードした。ハンガリーも1分30秒にフリースローからMocsaiが決め再度逆転、ポルトガルも2分15秒にポストシュートで再度同点。その後、激しい攻防が続き、ハンガリーの3分7秒に得た7mTを、ポルトガルのノーマークを両GKが阻む美技の連発もあって、第2延長かと思われたとき、ハンガリーが反則を得て右45度の地点からの最後の一投、ノータイムフリースローを左腕エースMocsaiがディフェンスの左上をかすめてゴール左の中段に決めて劇的な勝利を飾った。

［最終順位］

①ハンガリー　②ポルトガル　③ロシア
④ユーゴスラビア　⑤フランス　⑥トルコ
⑦チャイニーズタイペイ　⑧チュニジア　⑨ルーマニア
⑩ブラジル　⑪日本　⑫中国　⑬アルジェリア

IHF報告●●●●●●

競技規則の変更と改正（その1）

クリスター・アール(IHF/PRC)
翻訳　岸本光夫

おはよう

こんなに数多くの皆さんがコーヒーブレイクから戻ってきてくれていてうれしく思っている。IHF競技規則研究班の成果についてしっかりと聞いて欲しい。我がPRCのメンバーの中には、特にあなた方コーチを対象とした話題よりも先に、競技規則に関する呈示があると腹を立ててしまうかもしれないと心配するものもいる。個人的には、それはあまりにも悲観的すぎるのではないかと思っている。競技規則の変更については、我々はみんなが身近に携わり、そしてまた参画していくべきものだ、という考えにみなさんは賛同していただけるであろう。この話題に関して、私自身あまりにも熱狂的で、皆さんにはその熱狂のかけらでもお持ち帰りいただければと思っている。ところで、プログラムをご覧になると私の話は1時間半くらいかかると思われるかもしれないが、それほど長くならないので安心していただきたい。その代わり、競技規則の話題について特に引き続き検討していただく事項の説明に時間を割かなければならず、今日の午後と明日に各公用語グループに分かれて討議してもらうことにする。

1．経緯と原則

A.研究の経緯

今までの長い間、IHFは4年周期で競技規則の変更と改正の研究に取り組んできた。例えば、最近では1997年8月に変更を実施したし、現在我々が議論している変更点は来年8月に導入される予定である。オリンピックの時点で最高潮に達するよう、競技規則を変えない期間を設けること、及び新しい変更点を提案する前に、前回に変更した競技規則の効果を評価できる時間を十分に作ることを意図したものであった。しかしながら、このシステムは世界選手権大会がまだ4に1しか開催されていない時代に導入されたものであった。しかし実のところ現在、我々はフランスの男子世界選手権大会でも現行の競技規則を用いようと考えている。その代わり、正確に言うと2つのジュニア世界選手権大会から新しい競技規則を施行しようと考えている。4年毎という考えでよいとお思いだろうか？もしそうならば、現行の開始と終了の時期に意義があるであろうか？我々が皆さんにお尋ねしたいところは、もうお分かりであろう？4年を任期として、以前はPRCとCOCから直接参画して特別研究班を結成するのが常であったが、今回ははじめからCOCのメンバーも加わっている。私がこの研究班のコーディネイターであり、Erik Larsen氏(デンマーク)、Juan de Dios Roman Seco氏(スペイン)、Dietrich Späte氏(ドイツ)、Roger Xhonneux氏(ベルギー)がそのメンバーである。各メンバー所属の委員会委員長(Kjartan Steinbach氏、Hassan Mustafa氏、Peter Muehlematter氏)と我がPRCメンバーのManfred Prause氏の援助を受けて、我々は研究を行った。

この研究班は1998年半ばに発足した。その当時、全加盟国の協会にアンケートの回答をお願いした一件を覚えている方も多いであろう。我々は多くの会合を重ね、この2年間ずっと連絡を取り合って検討し続けてきたのである。事実、表象的な改良を少し加えて新しい競技規則書を3カ国語で作成するという仕事はまだ残っているが、実際の変更を提案するという我々の仕事はほぼ終わっている。というのは、今日から1週間にわたって開催されるIHF会議で、我々の提案に対する採択決議が行われるからである。それから、3カ国語公用語のうち、現在では英語を第一公用語にするというIHF採択決議に伴い、競技規則書のオリジナルバージョンが初めて英語で記載されることになるということを追加しておく。

B.全世界の参加

今、皆さんに申し上げたスケジュールの通りに進んでいくので、このシンポジウムでもし提案するのであれば当然急がなくてはならない。皆さん全員にとって、我々の考えや提案を修正する最後のチャンスである。多くは、ほとんど議論の必要がないと思っている。しかし、すぐ後で少し説明するとおり、いくつかの点においては皆さんの意見を聞くまで決定を待っている。だから、皆さんに協力をお願いしているのである。

今回の機会は、我々研究班が進めてきた全計画のまさに最後を締めくくるものである。今回は各国協会役員だけでなく、各国トップレベルのコーチ、審判長、国際審判員に至るまで意見を調査したわけであるから、以前よりずっと大変だったように思う。YamassoukroのIHF総会では有意義な議論が交わされたし、総会後すぐにフィードバックを受けたのである。

しかし、去年の初頭に行った我々の話し合いでは、特に未決定の提案事項について皆さん全員にアンケートを何時送るかがキーポイントだったように思う。200通を越える返事をいただき、こうして目の前を見ると皆さんの大部分がご回答下さったことが判る。特定の提案事項に関して単に回答をいただいたというのではなく、大変役立つものとなった。皆さんの多くは変更の必要性に対する全体的な考えや、遂行して欲しい独自の考えを我々に提言するチャンスを得たわけでもある。実際のところ、今我々が抱えている提案事項の多くは、皆さんの回答の中から生まれてきたものである。我々研究班は、このように参画していただいたことに深く感謝している。そして、我々が提案しようとしている事項は、少数の考えた結果ではなく、皆さんを含む大多数の考えの集約であることを知っておいていただきたいと思うのである。

C.競技規則改正の根本原則

常にはっきりとした原則と目的を基盤にして、我々は競技規則を変更し改正していかなければならない。新しい提案事項をすべて、ハンドボールを発展させようとする趨勢にぴったり合ったものにしなければならないのである。こ

の話題についてYamassoukroで大いに議論を行った。そこでは、観衆やスポンサー、マスコミの目にも魅力的で競合できる形でハンドボールを発展させていくことに重点を置いたのである。

以下に述べるように、いくつかの基本的な目標を達成するためには多岐にわたる支持が必要となる。ハンドボール競技の規則は、プレーヤーが素晴らしい技術力を発揮し、チームが新しく魅力的な戦術を披露できるようなものでなくてはならない。一方で、チームが組織ぐるみで「汚い」防御方法を用いたり、プレーヤーが相手の怪我をお構いなくプレーするようなことに対しては、厳しく評価するよう絶えず頑張っていかなければならない。つまり、スポーツマンシップに反する戦術を罰する規則及び解釈を、適宜、確立していく必要がある。

もう一つのはっきりした目標は、次から次へと展開していく連続した動きとスピードを特徴とする競技にすることである。観客は動きを求めているのであって、不必要で長い中断は嫌であり、ボールを所持しているチームの遅くて消極的な戦法は望んでいない。議論の的となるような、あるいは「お役所的」なレフェリーの判定を避けなければならないのは、これまた誰の目にも明らかである。したがって、レフェリーが専ら主観に基づいて判定しなければならないような状況を減らしていかなければならないし、競技規則を単純化して不必要制約を競技規則から排除していく必要がある。思うに、単純化が今回の我々の仕事のメインテーマであったろう。

競技規則の変更を提案するにあたって、世界中で、あらゆるレベルで、適切かつ現実的なものかどうかを常に考えなければならない。もし、新競技規則が国際レベルでしか対応できない技術力や人材を要するものであれば、これは能力に限界のあるレベルでは全く実現不可能な競技規則となるであろう。つまり、エリート集団にぴったり合う競技規則というのはユースレベルには全く不適切なものなのである。後で、ある4項目を皆さんに紹介するが、そのうち少なくとも２つは全く根本的なものであり、標準の競技規則には変更を加えないが、IHF主催の大会における特別規定として採用されるだろうと考えている（これはやがて大陸連盟においても採用されるはずであろう）。

D.変更の必要性の程度

この時点で、果たして本当にハンドボール競技規則の根本的な変更の必要性があるか、ということについてYamassoukroで大いに議論を重ねてきた。他種競技とうまく競合していく能力が我々にあるのかということについて、多くの参加者は強い関心を示していた。他種競技の規則の特徴を拝借するのが最善の方法であると述べた人もいたし、とにかく原稿の競技規則にいくつかの大変更を加えるのが最良の方策であると意見した人もいた。

しかし、我々研究班が皆さんのような中心人物の心の内を聞けば聞くほど、そして可能な大変更点について議論すればするほど、現時点で探索すべきものは根本的な規則変更ではないということがますますはっきりしてきた。一方で、現行の競技規則の適用を改良した小変更を望む声がますます大きくなってきたのである。象徴的な例えとして、ワールドハンドボールマガジン誌でDaniel Costantini氏が今後10年間の必然的趨勢について話しているのをつい最近知った。彼は、ハンドボール競技や規則における急激な変革について語っておらず、その代わりに、競技規則をもっと明瞭に一貫性を持って解釈し適用することが重要だと力説していた。

というわけで、今これから私が呈示する変更案の一覧を見て、皆さんは少し物足りなく尻すぼみの感を抱かれるかもしれないであろう。事実、自分達の結論を見て、もはや革命軍ではないのだと、我々研究班は少しばかり落胆しているような気がする。しかし、現時点において必要で望まれているものは円滑化と単純化であると真に心から信じているし、皆さんや我々自身が今回の検討課題に挙げた素晴らしい考えの数々は、そのいずれについても、決して慎重な議論をしないで簡単に片付けてしまったわけではないということを、再度念を押しておく。

2. 競技規則の変更案

これから、変更案について一つずつ簡単に説明を行う。全28項目のうち、24項目は競技規則変更に関わることであり、4項目は多分IHF規定の変更に関わることである。全項目の細部まで立ち入って話をすることはできないし、その項目の多くは実際のところ、それほど説明や議論を必要としないことはすぐにご理解いただけるはずである。勿論、本日の午後、各公用語グループで皆さんに議論してもらいたい項目については、もう少し説明を加えるつもりである。

分類して全体を展望しやすくするため、28項目を７つのテーマに分けることにした。これにより、各変更案がどのような意図に基づくものであるかをご理解いただけるであろう。勿論、変更案のいくつかについては他のテーマにも関連してはいるが、このような枠組みの方がいくらか役立つであろう。

A.一貫性の推進，すなわち主観性の削減

競技規則の中には、プレーヤーの意図の有無をレフェリーが判断して判定することになっているものがいくつかある。このようなことは一般的に不親切で非現実的な判定根拠であると我々は考える。そのような考え方を用いることが特に個所では、もしプレーヤーが「意図的に」ボールをサイドラインまたはゴールラインの外へ投げ出したならば、レフェリーはスローインではなくフリースローを与えるように規定されている。プレーヤーの意図を斟酌せず、判定は常にスローインとすべきであると我々は考えている。

競技規則書の競技規則解釈1には目下のところ、レフェリーがタイムアウトを「取らなければならない」「原則として取る」「必要に応じて取る」の3種のカテゴリーに分かれている。後ろ2つのカテゴリーを区別するのは困難であり、不自然でもある。よって「取らなければならない」はそのまま残し、残りの2つを一緒にして「取るかどうかはレフェリーの判断に委ねる」の2種類のカテゴリーに分ける。さらに、2分間退場はすべてタイムアウトを「取らなければならない」と変更する。2分間退場は現在のところタイムアウトに関して首尾一貫しない状況を生んでいるが、このように変更すれば平穏ですっきりするであろう。

IHF主催の大会規定において、センターラインからベンチまでの距離を3.5mと規定することを提案する。いすやベンチをあちらこちらに動かしたりすることは今までよくあった。これは不必要な苛立ちがしばしば原因になっていたし、時にオフィシャル席の仕事をしづらい位置にベンチが移動する結果となっていた。3.5mに設置すれば、勿論4.5mの長さがある交代ラインを目前にして座ることにより、プレーヤーはすみやかに交代できるであろう。

一貫性というテーマの中で、パッシブプレーの判定という大きな課題を抱えている。これについてはManfred Prause氏とDietrich Spaete氏に後で別に議論していただく予定なので、ここでは詳細に立ち入らない。予告ジェスチャーの導入の利点を未だ充分に活用できておらず、レフェリーもチームもこれを利用してより有効に対応することが重要だろう、ということを私はここでコメントしておきたい。あなた方コーチを怒らせるかもしれないが、例えば防御側チームのコーチが、攻撃側プレーヤーにもっとプレッシャーをかけろと防御戦術を変えようとするのではなく、レフェリーにプレッシャーをかけることに躍起になっていることなど。

B.迅速性と連続性

試合毎に予備の公認球を用意しなければならないにも関わらず、ボールが破裂するとか、持ち去ってしまうといった例外的な場合にしか予備ボールの使用を許可しないということを、これまで長い間、頑なに守ってきた。これは、不必要かつ長時間の競技中段やタイムアウトを生み出してきたし、レフェリーは大した正当性もないのにタイムアウトを取る気にさせられていた。予備ボールを使用していく、時間を節約できると思えば、レフェリーは競技中断時にいつでも予備ボールを認めることができる、と提案する。

1997年、スローオフを素早く行えるようにして、競技の迅速性と連続性を高めるように企画した。我々が期待したほど、チームはこの利点を生かそうとしなかったようなので、少々がっかりしている。スローオフが変化することを期待しているし、また1997年改正よりも、プレーヤーが取り組みやすいものがあるかどうかを探索してきた。センターラインのちょうど真ん中からスローオフを実施するということに気が回らないのかもしれない。プレーヤーは自分の位置に細かく神経を払わなければならないのである。コート中央でのフリースローと同様、当然ながら横方向に同じ、すなわち約1.5mの許容範囲を認めてはどうかと考えている(プレーヤーは片方の足をラインの上に置かなくてはならない)。同様に、現行の競技規則では、スローオフの笛の後、スローが実施される前に同チームのプレーヤーがセンターラインを越すと、相手チームにフリースローが与えられることになっている。これはお役所的で非実用的である。笛の音にプレーヤーを集中させ、そのときには違反の危険性なく動きをスタートさせてやるのが、より適切であろう。

レフェリースロー(バスケットボールではジャンプボールと呼んでいる)は、ハンドボールにおいては比較的新しいものである。これには長所があるかもしれないが、我々は短所の方が多いと結論づけた。レフェリースローは長い中断を招くし、不自然な形でプレーヤーが移動し、改めて位置を取らなければならない。ジャンプの状態が議論の種になることもあるし、またレフェリーがいつも上手にボールを放れるとも限らない。レフェリースローはいとも簡単に廃止できるであろうと考えた。というのは、全く同時に違反する状況は実際上存在しない。またボールが天井に当たってそのままコート外に出れば、ボールが直接コート外に出た場合と同じに扱えばよい。また、天井に当たってコート内に戻ってきたときは、最後にボールに触れたプレーヤーの相手チームのボール所持とすればよい。このことは、単純明快で前向きな変更と我々は考えているが、一方で1つの条項の全項目を競技規則書から抹消するという過激な響きを生じるかもしれない。この改正案について提案や懸

念があれば小グループ討論の際に議論していただきたい。

長年の間、特定の状況においてジェスチャー18を使用してきた(私が何の話をしているのか、お分かりかな？？)そう、勿論これは、コート上で負傷したプレーヤーに助けが必要なとき、チーム役員が罰せられることなくコートに入場できることを示す合図である。不都合なことに、実際のところ競技規則では、このジェスチャーは両チームのすべてのチーム役員とプレーヤーがコートに入ることを許可するとなっている。この事態に対する正当性は何処にも見当たらない。相手チームがコート上にいる必要性は全くないし、負傷したプレーヤーのチームメイトもコート上にいて何かの役に立つわけではない。恐らくはその場に出向いていった全プレーヤーの苛立ちとともに、コート上は言わば混沌とした状況に陥ることがよくある。さらにその後、競技を再開するのに多くの時間を要する。したがって、ジェスチャー18の意味を、怪我をしたプレーヤーのチーム役員２名のみがコートに入ることを許す、と変更することを提案する。

次の項目は、このセクションのテーマのようにスピーディーでスムーズに流れるゲームを目的とした内容なのかどうか、議論の余地がある。実際のところ、逆効果になるだろうという意見も多数ある。今お話しているのは、１試合のプレーヤー登録を12名ではなく、14名までとする考えについてである。より多くのプレーヤーを投じることができれば、よりハイ・テンポのゲームを期待できるかもしれない。しかし、これによってさらに専門性が進んで交代の回数が増えるであろうし、とどのつまりはスロー・テンポのゲームを生み出すかもしれない。専門性が進むこと事態、好ましい目標であるかどうかも疑問である。ユースのレベルでは、このような変更の影響に関して逆の見解を示している。この変更案は特性を助長するのか、若いプレーヤーがベンチで見学して浪費する時間を増やすことになるのか？このようなあらゆる議論の大半は、皆さんの方から出てきているものなのである。この問題について競技規則変更を提案できるほど徹底的に充分に研究するだけの時間が満足になかったため、我々研究班としては妥協策を進めているところである。世界選手権大会などの規定においては、14名のプレーヤー登録の採用について考えるよう、我々はIHFに勧告している。このような大会では、チームは13～14日間で９～10試合を行っており、１試合に登録できるプレーヤーの数を増やすことについては、明白で実際的な正当性が得られるであろう。特に、皆さん方の中には14名方式の経験をすでに有している方々がいらっしゃるのも承知しているので、小グループ討論の場で根本的な問題について議論していただくよう、切にお願いする。

C.単純化と効率化

1996年、４年周期の原則を崩して、ちょうどオリンピックの時にチームアウトを採用した。私はこの規定は一般的に適切なものであると結論づけてよいと考えている。研究班には、チームタイムアウトを廃止すべきであるとの提案も数カ国から確かに届いてはいるが、これがもうすっかり定着しているのは明らかであると思う。しかし、今思えばチームタイムアウトを導入する際にはかなり慎重だったようである。なぜなら、ひとつにはハンドボール界にとってこれがむしろ革命的な考えであったし、またひとつには通例と異なる時機で紹介されたからである。請求したタイムアウトがチームに与えられるのは、たった２つの限定された状況のみであり、このような状況は早々直ぐにやって来るとは限らない。どうしてもタイムアウトを欲しいチームが、この限定された状況となるのに５分も10分も待たなくてはならないことがあることはみんな経験しているように思う。それよりも、チームタイムアウトを与えられる２つのうち１つの状況がすでに生じているときに、コーチがタイムアウトを請求すると、レフェリーにとってもタイムキーパーにとっても極めて素早い対応を迫られることになる。したがって、チームタイムアウトを請求できる場合を自チームがボールを所持して競技しているとき、またはボールを所持して競技再開を待っている時に限れば、速やかにタイムアウトが与えられることになるであろう。と同時にチームタイムアウトを請求する際にはグリーンカードを用いることが唯一の方法であると規定する。

延長戦の時には、プレーヤーへの戦術的アドバイスのための機会やチームタイムアウトがないことを懸念する声が一部のコーチから出ている。一方で延長戦の前半終了後に休憩時間がないにも関わらず、コートを交代する時にどうしてもロスタイムが生じる。コーチと議論しないようにして素早くコートを交代するよう急がす必要が生じてくる。この両者を同時に解決するために、延長戦でコートを交代するときに１分間休憩時間をおくことにする。こうすれば、チームは早くベンチを交代し、その残り時間で戦術について話し合おうとするようになるであろう。

ボールがゴールキーパーによってゴールエリア内で止められた状況と、ボールがゴールラインを越えてゴール後方に出ていった状況とでは、数年前からその両者の違いはある程度なくされてきたが、今なお、いくつか残っており、時に混乱を招いている。後者の状況は、勿論、競技規則第12条に則ってゴールキーパースローとなる状況である。我々が提案するのは、両者ともゴールキーパースローの適用を受ける状況として扱うことである。これにより、ゴールキーパーが一旦ボールをコントロールすると、ボールがゴールエリアラインを越えるまでは再びインプレーにならず、そして自殺点の可能性もなくなることになる。

単純化が必要なひとつの状況として何年も討議されてきたものに、競技時間終了後に実施しなければならないフリースローがある。皆さんの中には、このようなゴールによって決定的な得点が入り、勝利あるいは敗北の興奮の渦に巻き込まれた方もいらっしゃることだろう。しかし、この規定はますます芝居じみて苛立たしい状況を造り出しているのである。つまり両チームは互いに欺き合おうとし、レフェリーが状況をコントロールするまで長い時間を要しているのである。さらに、最終的にはフリースローは不正な形で実施されてしまうのである。本日の後の講演の中でJuan de Dios氏とRoger Xhonneux氏に考えを披露してもらう予定であり、このルール状況をどのようにして単純化するかついてあなた方の考え方を待ち受けることになるだろう。

(次号につづく)

連載 11

NTS2000センタートレーニング報告

NTS運営副委員長 東根明人

NTSセンタートレーニングは、8月～9月にかけて全国9ブロックで行われたトレーニング結果をもとに、12月24、25日に小学生男女(堺市)、高校女子はU－19との連携を取り(名古屋市)実施いたしました。今回は、これまでのセンタートレーニングと「U－16選考&NTSセンタートレーニング」とし、以下の目的により1月13、14日に開催した標記トレーニングについて、アンケート結果を中心に報告します。

目的：①従来実施されていたU－16の選考合宿をNTSと連動し、各県各ブロックから競い合って選考されてきた有望な競技者から、将来世界で活躍できる競技者をU－16の日本代表とする。②若年層の指導強化の頂点として、U－16のスタッフは勿論のこと、全国の優秀な指導者が一堂に集まり、将来の世界で活躍する競技者育成について共通の知識・認識を持って、常に新しい方向に進む。③NTSセンタートレーニングでの指導方法は、常に世界を見つめ研究したもので、最先端・最高の指導を実施する。そして、この指導方法を全国の指導者にNTSを通じて、伝達し、指導方法の一貫性と将来の有望な競技者育成の土台として活用する。

トレーニングは、以下の日程で行いました。

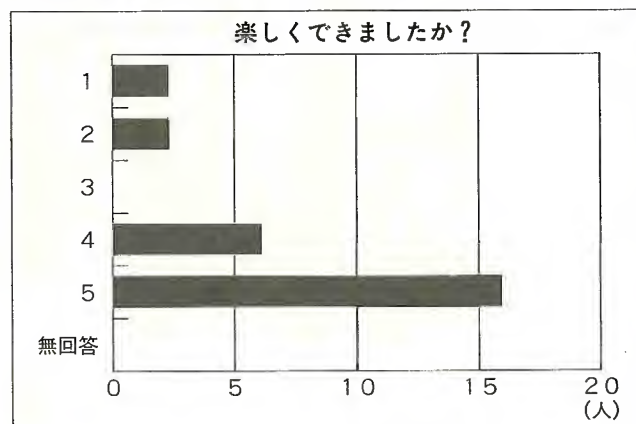
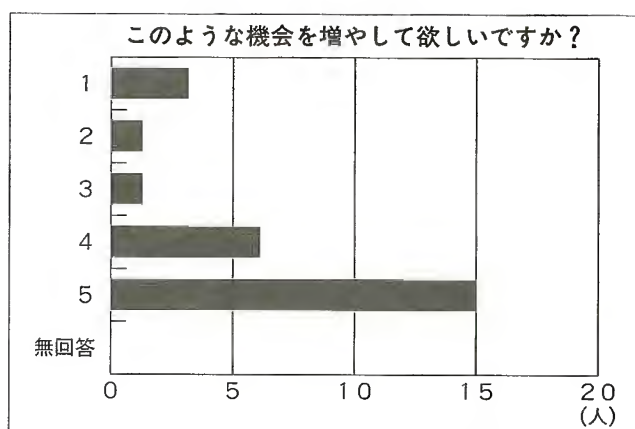
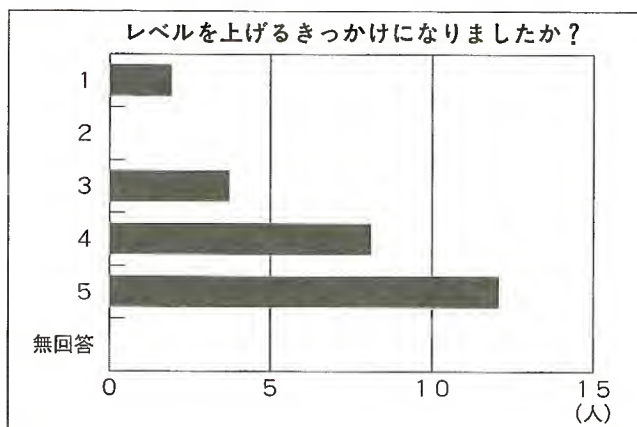
1月13日	中学生	指導者
14：00	体育館で受付後、着替え	受付後、移動
14：15	オリエンテーション・ウォーミングアップ	トレーニング見学
	コーディネーション・ボディーコントロール etc	指導方法の把握
	GKトレーニング・シュートコントロール	指導ポイントの検討
	Man－Man・2－2グループ戦術	トレーニングのヒント抽出
	3－3のグループ戦術	
16：15	U－16選考ゲーム	
17：15	宿舎へ移動	宿舎へ移動
18：30	入浴・夕食	入浴・夕食
	VTRによる指導（NTSで準備）	VTRによる指導（NTSで準備）
		戦術・技術などディスカッション
	栄養・水分補給など（大塚製薬）	栄養・水分補給など（大塚製薬）
22：00	就寝	就寝
1月14日	**中学生**	**指導者**
7：00	起床	起床
7：30	朝食・部屋清掃・事務手続き	朝食・部屋清掃・事務手続き
8：30	体育館へ移動（荷物を持っていく）	体育館へ移動（荷物を持っていく）
9：00	ウォーミングアップ	
	U－16選考ゲーム	U－16選考ゲーム見学
12：00	昼食	昼食
13：00	アンケート提出後、解散	アンケート提出後、解散

【役割分担】

「U―16監督・コーチ」
- U―16代表選考
- ゲームでのチーム分け、メンバーチェンジ
- トレーニングに関するアドバイス

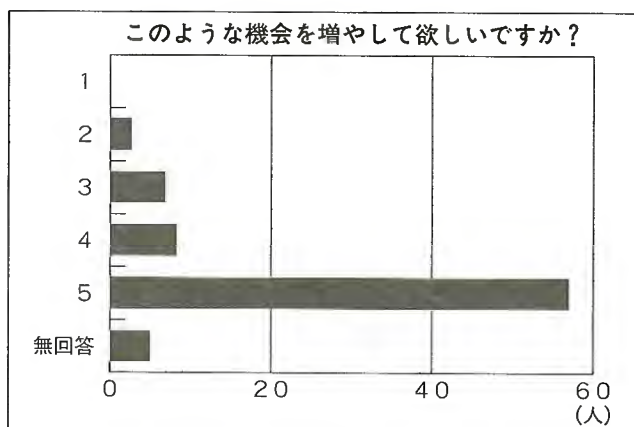
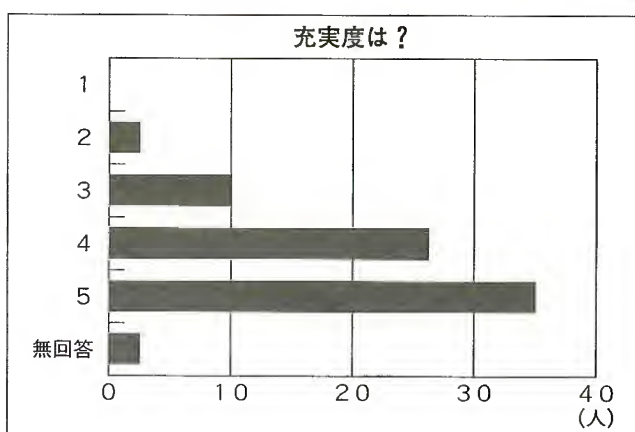
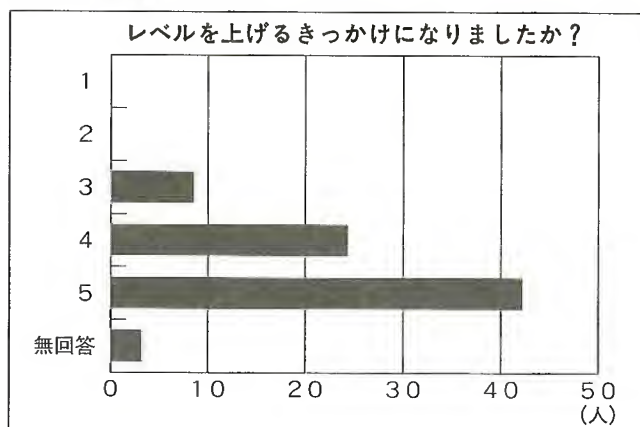
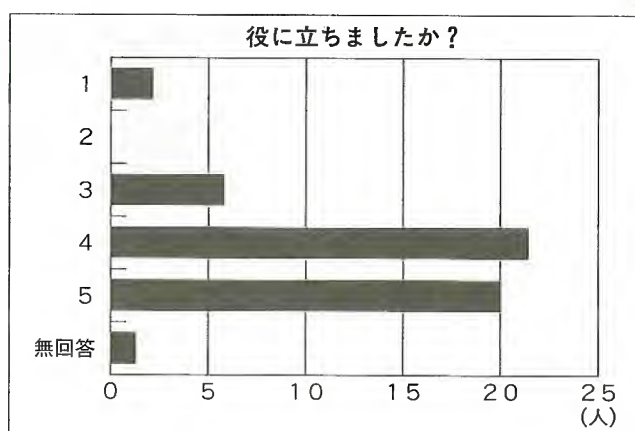
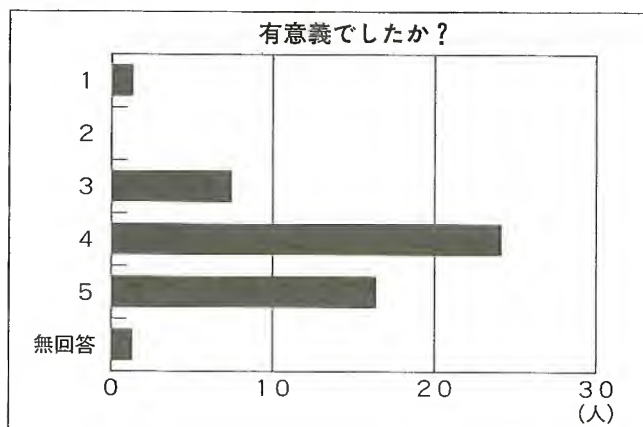
「NTS委員」
- 受付・事務手続き
- ウォーミングアップから戦術トレーニングまでの指導
- ゲームレフェリー

以下の表は1（悪い）──▶ 5（良い）で表しています。

小学生男女(26人)

中学生男女(75人)

指導者(50人)

アテネ作戦スタート

企画・広報委員
早川　文司

いよいよ2004年のアテネ・オリンピック出場を目指す強化計画がスタートすることになった。何しろ、ハンドボールがオリンピックのひのき舞台に立ったのは実に“遠い”昔のことであるのは、皆さんご承知のことであろう。男子は1988年のソウル大会以来３大会、女子は1976年のモントリオール大会を最後に６大会も出場権を逃し続けているのだ。

そうした状況の打破を念頭に、昨年の春に立ち上げたのが「アテネ強化特別委員会」である。とにもかくにも「強いジャパン」の再建が主目的であることは言うまでもない。

そこで今回、その第一弾として公表されたのが選手強化策。まずは男子に絞って、ヨーロッパのトップレベルであるスペイン留学を実施することになった。既にバルセロナに強化拠点を設け、各国のレベルを始め、世界の最新の戦術、技術などの収集に乗り出しているという。

選手は将来的に日本を背負って立つ若手に絞り、最大で７人を予定しているというが、今回は学生、実業団合わせて６人が２ヵ月の予定でバルセロナへ旅立った。スペインリーグのセレクションを受けるためには、この時期が最も適している。どのレベルのクラブからオファーが来るかも楽しみである。

スペインではとにかく“ハンドボール漬け”にして、世界トップレベルに接し、ありとあらゆるものを吸収させ、それを還元させることも目的のひとつである。

派遣される先取は、いわばフレッシュな目で世界を経験し、大きくはばたいてもらいたいものである。国内だけでの「井の中のカワズ」では、世界からは遠のいてしまう危険性がある。厳しい戦いを乗り越えて、コートに立ち結果を出すのは、並み大抵なことではないだろう。でも、そうしたことを身を持って体験することも、また大きな収穫ではなかろうか。

さらに付け加えれば、留学費用をバックアップしてくれる企業などへの“恩”も忘れないでほしい。今の厳しい経済界にあって、あえてバックアップすることは大変なことだろう。そうした中、あえて協力してもらえることは、それだけ責任が重いともいえよう。

緒方強化委員長は「ハングリー精神を持って、厳しい戦いをクリアしてほしい」と話している。７人の中には「大化け」する選手がいるかもしれない。そうなればこの初めての企画は大成功だ。

なんとしても、与えられた期間をハンドボールに体力、精神力、技術などすべてをつぎ込んで、アテネへの道を大きく開いてもらいたいと思うのは、私だけではないはずだ。継続させるのは、特に最初が肝心。そういった意味からも、今回の第一陣はあらゆる面から注目されていることを肝に命じておいてほしい。

ANA

※貯めたマイルは、航空券に換えてからご利用ください。

ANA
ANA MILEAGE CLUB
012 345 6789
RICK LEDGER

PICK ME UP!
ENOUGH MILES!

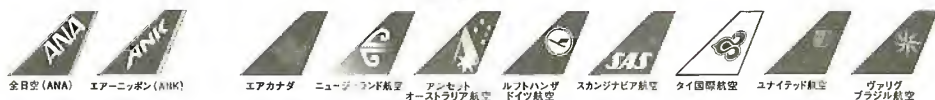
The MILEAGE of MILEAGES

ネットワークがひろがって、マイルがさらに貯めやすく、使いやすくなりました。

今、全日空の空が大きく広がろうとしています。充実した国内線はもちろん、国際的な航空会社ネットワーク「スターアライアンス」への加盟により、国際線もさらに拡大。マイレージも、ぐっとワイドに貯まります。選ぶなら、やっぱり「ANAマイレージクラブ」。貯めやすさが断然ちがいます。

*スターアライアンス加盟の提携エアライン

全日空（ANA）　エアーニッポン（ANK）

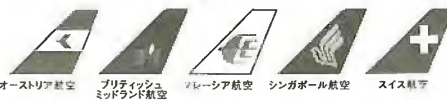
エアカナダ　ニュージーランド航空

アンセット オーストラリア航空

ルフトハンザ ドイツ航空

スカンジナビア航空

タイ国際航空

ユナイテッド航空　ヴァリグ ブラジル航空

*スターアライアンス以外の提携エアライン

オーストリア航空　ブリティッシュ ミッドランド航空

マレーシア航空

シンガポール航空

スイス航空

ANAマイレージクラブ

10月31日 全日空は、スターアライアンスに加盟。世界112ヶ国以上、760以上の都市をネットワークで結びます。

小学生チーム活動特集

前号に引き続き２つの小学生クラブの活動報告をご紹介いたします。

■横瀬ハンドボールクラブスポーツ少年団（大分県）

はじめまして、横瀬ハンドボールクラブスポーツ少年団です。

私は監督をしています小川哲弘です。職業は小学校教師です。

現在、大分県内に７つの男子チームがあり、どのチームも熱心な指導者のもとで、がんばっています。チームの存続が年々難しくなっている中、子供たちや保護者が入部をはたらきかけ、部員数の維持・増加に向け、努力しています。

横瀬ハンドボールクラブの部員数は６年生９人、４年生９人、合計18人（残念ながら５年生は０人）で楽しく活動しています。(2001年１月現在)

1988年(昭和63年)にクラスの仲間づくりを目的に秋吉先生が子供たちに呼びかけ、その後ハンドボールスポーツ少年団として結成されました。1991年に全国大会出場と九州大会優勝を果たしています。その後、低迷が続きましたが、1997年(平成９年)に九州大会に出場しています。

私が、当ハンドボールクラブを指導しはじめた１年目(平成10年）から運よく全国大会に出場することができ、成績はベスト８でした。２年目は、予選敗退で全国小学生男子ハンドのレベルの高さ（特に九州各県チームの強さ）を痛感しました。３年目(2000年)は、５年生からレギュラーとして活躍していた子供が３人おり、横瀬チームとしては過去最高の全国３位になることができました。

ここ３年間(1998～2000年)、全国大会に出場することができましたが、大分県内の予選は決して楽に勝ち得たものではありません。明野西小や明野北小との１点を争う接戦を制しての全国切符でした。接戦を勝っての劇的な県内優勝は格別で、試合終了のホイッスルが鳴った時は、みんな大喜びでした。

１学期の終業式の時には、全校のみなさんが全国大会出場激励壮行式を催してくれました。横瀬小の先生方や友達、保護者など地域の方々みなさんから温かい激励の声をいただいたことを感謝しています。

横瀬のみなさん、本当にありがとうございました。

指導方針としては、ハンドボールの技術向上だけではなく、「ねばり強くやり抜き、ながつづきする力」「かんがえる力」「まなびあう力」を子供たちにつけることをめざしています。「な」と「か」と「ま」で「なかま」です。

21世紀を迎え、携帯電話、パソコン、インターネットなど益々便利な世の中になり、いながらにしていろいろな情報を入手でき、音声や文字による通信が簡単にできるようになった反面、自分の身体と頭や心を思いっきり使うことが少なくなってきている気がします。学校でも、いじめや不登校、学級崩壊などの問題が深刻化し、社会問題となっているこの頃です。

今の子供は、遊びの中で学習することが少なく、地域の方々とのふれあいもほとんどありません。汗びっしょりになるまで走り回ったり、けんかしたり、いたずらをして近所のおじさんから叱られたり…。私たちが子供の頃は、学校外で学ぶことがたくさんありました。

きついこと、嫌なことから逃れたり、楽な方に流れるところは子供のみならず、大人にもあります。反面、できないことをできるように努力すること、きつくてもがまんし、ねばり強くやり通すことも人間なら誰しもが潜在的に持っている力です。そして、それを達成した時の喜びは大変大きなもので、次の課題にチャレンジしていく意欲にもつながります。その中で思考力が育ち、さらに友達と教え合ったり、励まし合ったりする「学び合う力」が育つと信じています。そういう学習を重ねることで「なかまづくり」ができ、チームワークが作られていくと思います。

《練習は週３～４回（火曜、木曜、金曜と土曜日は練習試合２時間)》

①ランニング(10分)　②ストレッチ運動　③キャッチボール　④パス練習　⑤シュート練習　（休憩）　⑥速攻　⑦ゲーム　（かたづけ）　（解散）

キャプテンを中心に個人のめあてとチームのめあてをもった主体的な練習を目指しています。声を出すことを忘れずに、常に活気のある練習をこころがけています。特に、小学生の場合、練習回数や時間は少なめに能率的な練習が重要だと思います。

また、ハンドボール技術のレベルアップも大切ですが、小学生の場合は特にハンドボールの魅力や楽しさを知ることが最も重要です。

私は小学校教師をしていることから、学校教育という違

う角度でハンドボールというスポーツを述べさせていただくと、ハンドボールは、現学習指導要領では小学校の体育学習の内容とはされていませんが、ゴール形態はサッカー系、ボール・コントロールはバスケット系が要求されることから、ほとんどの子に経験がないものの、容易にゲームが成立可能であり、楽しく運動できる集団スポーツです。さらに2002年度から実施される新学習指導要領では,「高学年のボール運動について、地域や学校の実態によってハンドボールを加えて指導することができる」となっています。

子供たちは、低学年の頃から、体育時や休み時間にドッジボールに慣れ親しんでおり、「投げる」運動を特に好みます。ドッジボールは、相手にボールを当てることが得点ですが、ハンドボールは、２つのチームが入り交じって、パスやドリブルをしてボールを運び、相手ゴールに投げてシュートして得点を競い合う運動です。子供たちが好む「走る」「跳ぶ」「投げる」の３つの運動が盛り込まれたハンドボールは子供達の運動欲求を満たし、ゲームの楽しさを追及できるすばらしいスポーツです。

そのすばらしいスポーツであるハンドボールを一人でも多くの小学生に知ってもらい、ハンドボールを通じて心身ともにたくましく成長してもらいたいと強く願っています。

そして底辺である小学生ハンドを今以上に広げ、レベルアップすることで中学、高校、大学、社会人とハンドボール全体が発展していくことを期待致します。

■京田辺市立桃園小学校ハンドボールチーム（京都府）

①団体名・指導者名…

京田辺市立桃園小学校ハンドボールチーム

監督・西城　誠一

②所属児童数…平成13年２月現在

	３年生	４年生	５年生	６年生	合　計
男　子	14名	10名	8名	11名	43名
女　子	10名	8名	9名	6名	33名
合　計	24名	18名	17名	17名	76名

③ハンドボールチーム発足の経緯

京田辺市といえば、小学生ハンドボーラーにとってはいわずと知れた、全国小学生ハンドボール大会の開催地であります。

京田辺市が、昭和63年に開催される京都国体のハンドボール会場に決定したことをきっかけに、昭和61年から、市内９小学校でハンドボール教室が教育委員会主催で開催されるようになり、市内小学生の大会、京都府大会、市内小学生交流大会と開催されるようになり、昭和63年から開催されている全国小学生ハンドボール大会も13回を数えるにいたりました。

そのことから、市内９小学校でハンドボール競技が急速に普及し始め、毎年６月に開催される市の大会では、学年男女別に40チーム以上が参加し全国大会をめざして熱き戦いが見られます。また先日、２月24日に開催された市の小学生交流大会では、３年生以上の学年男女別62チーム・521名が参加し、４会場・５コートに分かれて熱戦を繰り広げました。

桃園小学校においても、昭和61年からハンドボールチームの育成に取り組み、チーム結成15年を過ぎました。平成８年には、第９回全国大会に女子チームが初出場・メダル獲得を果たしました。以来、女子チームは全国大会に４回出場し、ベスト８、３位、準優勝という成績を残しています。一方、市の大会で強豪を相手にあと一歩のところまで粘りながらも、全国大会出場を果たせなかった男子チームも、昨年度の大会で念願の初出場を果たし、一戦一戦自信をつけ決勝戦にまで進出することができました。

④指導にあたって特に留意している事項

近年の子ども達の運動能力・体力の低下は著しいものがあります。塾や習い事などで、放課後に体を動かす時間も少なくなり、運動能力・体力の低下や遊ぶ機会が少なくなったために人とのコミュニケーションも希薄になってきています。

そんな中で、ハンドボールは「走」「跳」「投」のバランスがとれているだけでなく、「瞬発力」と「持久力」の相反する双方の力や「敏捷性」や「力強さ」も要求されます。小学生にとってハンドボールは、運動能力や体力を高めるのにもってこいのスポーツです。また、選手交代が自由であるハンドボールは、チームワークを高めることが容易です。低学年時期にドッジボールでボールを投げる喜びやゲームを楽しむ喜びを覚えた児童は、３年生からハンドボールをはじめることを楽しみにしています。

３・４年生時期には、体の負担を考え練習回数を土曜日の週１回にとどめるようにし、週末が近づくと「ハンドボールがしたい」という欲求を高めて練習に参加できるようにしています。技術指導は、基本的な運動能力・体力の向上を第一とし必要最低限にとどめるようにしています。例えば、３年生時期には、シュートもステップシュートの指導にとどめ地肩づくりをします。反復的な練習により、けがをしない体作りをするとともに、上学年の練習を見て、「技術習得したい」という児童の欲求を高めます。試合では、戦術や技術に頼らないようにし、のびのびとプレーさせるようにしています。また、ハンドボールを通して仲間とスポーツを楽しむ喜びを十分に味わわせるように心がけています。勝ちも負けも味わう中でこそ、「試合に勝ちたい」という気持ちが高まってくるのではないかと考えているからです。

児童の欲求・気持ちが十分に高まった５年生からは、平日の放課後時間を利用して週４～５回の練習を行います。５・６年生合同での練習の中で、フィジカル面・メンタル面ともに大きく成長していきます。

桃園小学校では、このハンドボールを保護者の願いから「体づくりの場（フィジカル）」「仲間づくりの場（コミュニケーション）」「自信をつける場（メンタル）」を実践する活動であると考えています。

⑤地域社会と学校との連携・関わり方について

京田辺市は、小学生全国大会の開催地であり、市をあげて小学生のハンドボールの活動に力を入れています。教育委員会主催で毎年、市内全小学校で３年生以上を対象にハンドボール教室が実施され、各校でハンドボールの活動が活性化していきます。

また、全国大会を頂点とした市内小学生大会・市内小学生交流大会の実施、全国大会・近畿大会・京都府大会に向けての中央教室の実施、各大会参加に対する援助等、教育委員会の協力を得て、ハンドボールの活動が成り立っています。

こんな協力体制の中、桃園小学校では、学校と保護者や地域と協力し合って活動を推進しています。指導についても、教員や保護者、地域の方、OB・OGなどが連携しながら、教えています。また、大会向け練習では、市内中学校のハンドボール部に協力を得て活動しています。

いわば、少年団でもなく学校のクラブ活動でもない学校・地域・行政が一体となって取り組んでいる、他にあまり例のないスタイルのチームなのです。

忘れてはならないのが保護者会の全面的なサポートです。子ども達が、安心して活動できるように、各家庭での日常のフォローはもちろん、保護者同士の連携を取り合いながら活動をバックアップしていただいています。会費の徴収やスポーツ保険の手続き、子ども達の送迎や健康管理など心強い支援です。練習のない日でも、運動場では親子でハンドボールを楽しむ姿が垣間見られます。

⑥ある日の練習メニュー（５・６年生）

時　刻	時　間	メ　ニ　ュ　ー
13:00	10分	◇準備運動・ストレッチ
	5分	◇ランニング
	15分	◇フットワーク練習 ・ダッシュ、ダッシュ＆ストップ、ダッシュ＆ターン ・６ｍ⇄９ｍダッシュ＆バック ・サイドステップ、バックステップ
	5分	◆休憩
13:35	15分	◇パス練習 ・コンビパス（ショート、ロング、ランニング） ・四角パス、三角パス
	20分	◇シュート練習 ・ステップ、ジャンプ、フェイント ・ポジション別シュート ・１人速攻、コンビ速攻、スリークロス
	10分	◆休憩
14:20	15分	◇３対３ミニゲーム
	15分	◇ハーフコートでの６対６
	10分	◆休憩
15:00	60分	◇ゲーム（５・６年男女別）
16:00	10分	◇クールダウン ・ランニング、ストレッチ
	15分	◆ミーティング
16:30	5分	◆片付け

⑦他団体指導者への助言等

前述のとおり、市内全小学校でハンドボールチームが活動しているので、大会以外にも合同練習や練習試合を定期的に行い、切磋琢磨しつつ、お互いのレベルアップを目標に交流を図っています。

また、指導者同士も市内小学生チームのトータルレベルアップを目標に指導方法を交流しあっています。

⑧その他・目標等

平成12年は、初めて男女アベック出場を果たしました。今年も激戦を勝ち抜き、ぜひ男女アベック出場・メダル獲得を果たそうと子ども達もがんばっています。子ども達の願いに沿うような、よき指導をこれからも心がけていきたいと考えています。

子ども達は、大会・試合ごとにいろいろなことを経験し成長していきます。このハンドボールの活動で「体づくりの場（フィジカル）」「仲間づくりの場（コミュニケーション）」「自信をつける場（メンタル）」を実践することにより、子ども達の健やかな成長を願っています。

・人・物・登・場・～そのとき活躍した人々～

さて今回登場いただくこの人は…

深美　成男 さん

(昭和12年12月9日生)

都立墨田川高校出身。その後東京教育大学へとすすみ、卒業と同時に監督に就任。2部落ちと1部昇格への苦しみも味わった。羽田工業・東村山など都立高校を歴任し、芸術高校の校長を最後に定年退職。現在は、都内の2つの中学をかつて全国制覇に導いた青木徹先生が理事長を務める埼玉県の開智学園中学・高等学校の副校長。東教大・筑波大ハンドボール部ＯＢ会（茗球会）の会長として、現役部員達を温かく見守っている。

ハンドボールとの出会いについて教えて下さい。

私がハンドボールを始めたのは都立墨田川高校の体育の授業でした。当時、松本重雄先生(元日本協会理事)が在職されていて、ハンドボールがとても盛んな学校でした。高校時代は目立った戦績はありませんが、3年になりハンドボールがとても面白くなってきたとき、松本先生から東京教育大には国立大唯一の「体育学部」があるのでそこでハンドボールを続けてみては、とすすめられ、迷わず進学しました。学生時代には松本先生のほか、岡村昭二・佐野和夫(いずれも元日本協会理事)先輩などから指導され、監督も岡村氏が務めていました。卒業後、その後を受けて監督を8年務めましたが、故北井晴次君・大西武三君（現・筑波大監督）・平岡秀雄君（現・東海大監督）などがナショナルプレイヤーになってくれたことが喜びでした。

当時のハンドボールはどのようなものでしたか。

11人制では35mラインがあり、フォワードだった私は走る練習がとても辛かったです。でもシュートしたときの爽快感は格別でしたね。当時の関東学連は芝浦工大の全盛期で、芝浦や日体大にどれだけ得点するかが私の一番の目標でした。年の暮れには7人制の「全日本室内選手権」が行われていましたが、今の技術とは程遠く、11人制と大して違わない攻防でした。11人制も7人制も、全日本総合はフリーエントリー。いかにチーム数が少なかったかが思い起こされますね。20年ほど前に、縁あって東大と京大の定期戦の審判をしたときに、私と同世代のＯＢ戦は11人制で行われて、何ともおおらかな感じと共にとても懐かしかったですね。学生時代には東西対抗に選抜されたこともありました。全日本女子の監督だった井薫氏もそのときのメンバーの一人でした。

ハンドボールを通して忘れられない思い出を教えて下さい。

そうですね、かつて『日本ハンドボール史』の「私の思いでの1試合」にもごくわずかな文章を書かせていただいたのですが、昭和34年、第11回全日本総合選手権が熊本県水俣市で行われたとき、当時水俣病で騒がれていたその地を自らの目で見てきたことは、その後教職についた私には本当に役に立った経験でした。プレイヤーとして、また指導者として、約45年間ハンドボールに打ちこんできた私にとって思い出は沢山ありますが、多くの後輩が全国各地で指導者として、また審判や現役のプレイヤーとして活躍してくれていることは同好の士として本当に嬉しいかぎりです。また、ハンドボールの教え子も300人を超え、それぞれ一人一人がハンドボールの思い出を持っていることも、教師冥利につきる思い出ですね。

今の日本ハンドボール界に望むことは何でしょうか。

私は高校生の体育を指導していて、ハンドボールはとても良い教材だと思っています。異動したそれぞれの学校でも、同僚にも訴え、それを理解してもらい、常にハンドボールを取り入れて来ました。ゴールポストを手作りして授業をしたこともあります。しかし、今までの学習指導要領がバスケットボールとの併例だったこともあって、ともすればポピュラーなバスケットボールが優先されがちだったことは否めないでしょう。その理由は、やはり指導者不足にあると思います。約20年前の10年間、故難波俊夫氏(日本女子体育大学教授)の要請で、同大学のハンドボールの授業に携わりました。将来教職に就くであろう学生に手作りのプリントを配布し指導法を講義していると、それを知った難波氏が二人の共著を出そうと提案してくれました。専門としていない人にでも指導出来易いようにと無い知恵を絞ってわかりやすい文章で技術段階を追った内容の本を作ろうと話し合いました。他の種目を専攻していた卒業生から「あの本を参考にしながら、今部活でハンドボールを指導しています」などの便りがあった時はとても嬉しかったですね。近年小学校の学習指導要領にもハンドボールが入ったことを耳にしましたが、スポーツ少年団でハンドボールを指導している大西武三夫妻の努力が報われつつあると大変に嬉しく思っております。頂点はぜひオリンピックの出場を果たしてもらいたいが、ピラミッドの底辺を広くすると共に、高さも高くする努力も併せて行っていく必要があるとつくづく感じております。日本協会がそのリーダーシップを取ってくれることを、切に望んでおります。

深美さん、どうもありがとうございました。
次号もお楽しみに。

平成12年度 岩手県小学校ハンドボール研究集会報告

1．期　日　平成12年11月18日(土)

2．会　場　岩手県立盛岡第二高等学校体育館及び視聴覚室

3．参加者　103名（参加者リスト参照）

小学校校長	1名
小学校教諭等	55名
中学校教諭等	5名
スポ少指導者	3名
高校教諭	5名
指導主事	2名
会長	
二高ハンドボール部3年生	5名
岩手大学附属小学校4年生	25名
盛岡市立松園小学校4年生	1名

4．テーマ　「ボール運動教材としてのハンドボール」

5．趣　旨

平成10年度小学校学習指導要領が改訂され、ハンドボールが「ボール運動」として初めて採用された。このことは、学校体育において、児童生徒の体力・運動能力の低下が指摘されている昨今、以下のようなハンドボールの運動特性が、教材価値として認識されたものと捉える。

① 子供たちの発育・発達を促すのに適したバランスのとれた運動教材である。

② 教材づくりや戦術学習が、比較的容易である。

③ 小学生にとっては、ボール操作が容易で、取り組みやすく楽しくできる。

また、小学校期にハンドボール型のボールゲームに親しむことは、生涯スポーツへの参加意欲を高めることにつながるものと考える。

本研究集会は、このようなハンドボールの魅力や特性、教材性について理解を深めるとともに、小学生に適したハンドボールの授業づくりについて研究協議し、実践的指導力の向上を目的として開催するものである。

6．内　容

(1) アトラクション

小学校4年生の授業で行ったゲーム
岩手大学教育学部附属小学校4年生
指導者　三浦 健成　教諭（担任）
　　　　椺内 典明　教諭（ハンドボールクラブ担当）

(2) 開会行事

あいさつ　　岩手県ハンドボール協会会長　箱崎 敬吉

(3) 講　義

「ハンドボールの授業について」
水沢教育事務所指導主事兼保健体育主事　山本　繁

① ボールゲームの教材開発のすすめ
② ボールのいろいろ、その選び方
③ 文部省指定校の和賀西小学校の実践発表（ビデオで説明）

(4) 講　演

「ハンドボールの教材価値について」
秋田大学助教授（日本ハンドボール協会）　佐藤　靖

ハンドボールのゲームの構造特性
ハンドボールの教材価値
ビデオ鑑賞（世界の子供のゲーム遊び）

(5) 実　技

「ボール遊びからボール運動ハンドボールへ」
水沢教育事務所指導主事兼保健体育主事　山本　繁
大船渡教育事務所指導主事兼保健体育主事　柏舘 秀一
盛岡第二高校教諭　中島 昭博

岩手教員クラブ部員
北上市立鬼柳小学校教諭　平澤 和史
前沢町立古城小学校教諭　高橋 昌平
前沢町立前沢小学校講師　佐藤 正輝

盛岡二高ハンドボール部3年生5名

使用球………小学生用ハンドボール（モルテン）
使用ゴール…正規のハンドボールゴール

① 準備運動・体操・じゃんけん砦・ストレッチ・ものまね走
② ブレイク・スルー（くぐり抜けゲーム）
③ キャッチボール　一人
④ ドリブルサバイバルゲーム
⑤ キャッチボール　二人組
⑥ 注文付けキャッチボール
⑦ ハンドボール型ボールゲーム
　ア、低学年向け的当てゲーム　「シュートゲーム」
　　女性の参加者で体験
　イ、中学年向けゲーム　「バウンドボール」（ポートボール型のゲーム）
　　男性の参加者で体験
⑧ ハンドボール
　ア、男性チーム VS 男性チーム
　イ、男性チーム VS 女性(現役プレーヤー)チーム
　ウ、盛岡二高ハンドボール部3年生(＋指導者) VS 実技講師チーム

7．成果と課題

○ 全国研究集会を受けての県研究集会であり、テーマ・趣旨、内容とも適切であった。

○ 岩手県協会主催の研究集会として会長自ら挨拶に出向いてくださり、初の試みの研究集会として権威あるものとなった。

○ 講演に日本協会を代表して、秋田大学の佐藤靖先生においでいただき、しかもすばらしい講演内容とビデオで、

平成12年度小学校ハンドボール研究集会　参加者リスト

No.	氏　名	所　属	職名	学年
1	小原眞澄	山形村立繋小	校長	
2	熊谷光芳	盛岡市立飯岡小	教諭	5年
3	豊川浩子	滝沢村立滝沢第二小	教諭	5年
4	高橋真弓	西根町立大更小	教諭	5年
5	清水武彦	前沢町立前沢小	教諭	6年
6	佐藤正樹	前沢町立前沢小	講師	2年
7	山田秀勝	盛岡市立松園小	教諭	6年
8	須藤千恵	紫波町立彦部小	講師	担任外
9	有馬　賢	盛岡市立河北小	教諭	4年
10	福島　淳	岩手町立水堀小	教諭	3年
11	寺牛幸治	紫波町立水分小	教諭	5年
12	藤原瑞枝	滝沢村立滝沢東小	講師	4年
13	玉山　勉	石鳥谷町立石鳥谷小	教諭	6年
14	川原千文	石鳥谷町立石鳥谷小	教諭	1年
15	中込正治	盛岡市立繋小	教諭	2年
16	佐藤昭雄	盛岡市立高松小	教諭	5年
17	村田禎治	岩手町立沼宮内小	教諭	5年
18	鈴木義幸	岩手町立沼宮内小	教諭	5年
19	菊地一隆	岩手町立沼宮内小	教諭	3年
20	鹿糠　康	久慈市立久慈小	教諭	5年
21	中島克行	北上市立岩崎小	教諭	5年
22	林　一広	北上市立岩崎小	教諭	教務
23	沖村朋子	花巻市立湯本小	教諭	1年
24	千葉明子	盛岡市立北厨川小	教諭	3年
25	太田勝浩	盛岡市立北厨川小	教諭	教務
26	福士貴久勇	矢巾町立煙山小	教諭	4年
27	熊谷明俊	矢巾町立煙山小	教諭	2年
28	粕谷恵美子	矢巾町立煙山小	教諭	2年
29	鷹嘴陽一	盛岡市立上田小	教諭	4年
30	荒木　航	盛岡市立上田小	教諭	6年
31	平澤和史	北上市立鬼柳小	教諭	6年
32	渋谷夏子	玉山村立巻掘小	教諭	4年
33	羽根田美由紀	葛巻町立葛巻小	教諭	4年
34	多田　敢	盛岡市立東松園小	教諭	5年
35	谷藤みゆき	盛岡市立東松園小	教諭	4年
36	楳内典明	岩手大学教育学部附属小	教諭	3・4年
37	三浦建成	岩手大学教育学部附属小	教諭	4年
38	高橋昌平	前沢町立古城小	教諭	4年
39	米沢久美子	千厩町立千厩小	教諭	2年
40	阿部直樹	盛岡市立中野小	教諭	5年
41	佐藤靖之	玉山村立好摩小	教諭	5年
42	酒井伸一郎	大迫町立外川目小	教諭	3年
43	小山田誠幸	雫石町立安庭小	教諭	6年
44	相墨　純	江刺市立玉里小	教諭	3年
45	村井利家	矢巾町立矢巾中	講師	
46	小野朋子	盛岡市立黒石野中	スクールヘルパー	
47	阿部幸男	西根町立西根第一中	教諭	中学3年
48	西野淳一	紫波町立矢巾北中	教諭	
49	工藤真理子	紫波町立矢巾北中	コーチ	
50	長野たづ子	スポ少リトルハンド	スポーツ指導員	
51	柏舘秀一	大船渡教育事務所	指導主事	
52	山本　繁	水沢教育事務所	指導主事	
53	高橋るみ子	北上市立和賀西小	教諭	6年

ボランティア参加

1	赤坂真美	盛岡第二高校ハンドボール部3年生
2	武田麻美	〃
3	下川原　綾	〃
4	工藤ますみ	〃
5	菅原優香	〃

大変盛り上がった。

○ ビデオは、世界の子供たちのゲーム遊びで、我々が普段やっている遊びやハンドボール型のゲームがほぼ同じで、我々の実践が「世界標準」であることを裏付けた。

○ 文部省指定校の和賀西小学校の実践を、資料とビデオで発表することができた。

○ 参加した先生方は、大変熱心に講義や講演を受講し、実技は大変意欲的であった。

口々にハンドボールのおもしろさを感想として述べていた。

ハンドボールに興味・関心のある若い先生方がたくさんいることがわかり、大変心強く感じた。来年度も開催し、もっと多くの先生方に普及させたい。

○ ボールメーカーのご配慮で、参加者全員に実技で使用した小学生用ハンドボールを1個配ることができた。

○ 盛岡二高の計らいで、ハンドボールゴールのある体育館を会場とすることができた。

▲ 年間予定にない事業であり、他の行事と重なった地区や学校があり、参加できない方々も多かった。目標の100名参加には届かなかった。

▲ 岩手県の普及に関わる経費としてもう少し多い金額を年度始めから予算化してもらいたい。

▲ 内容をより吟味し、ハンドボールの魅力を伝えたい。

(文責・山本)

全日本実業団ハンドボール　チャレンジ2001

Aグループは北陸電力、Bグループは自衛隊久里浜が制す

全日本実業団チャレンジ2001は、2月10日から12日までの3日間、志木市民体育館、吉川市総合体育館、大崎電気工業株式会社体育館を使って開催され、Aグループは北陸電力、Bグループは自衛隊久里浜がそれぞれ第1位となった。

■Aグループ

★aゾーン

三　景（福井）	29－20	豊田合成（愛知）
三　景	24－21	八光自動車（大阪）
八光自動車	31－25	豊田合成

★bゾーン

北陸電力（福井）	21－14	金沢市役所（石川）
北陸電力	25－17	大阪ガス（大阪）
金沢市役所	25－24	大阪ガス

★3位決定トーナメント1回戦

金沢市役所	31－30	八光自動車

★3位決定戦

デンソーファドレス（愛知）	36－27	金沢市役所

★決勝戦

北陸電力	20－16	三　景

[順位]

優　勝　北陸電力（福井）
第2位　三　景（福井）
第3位　デンソーファドレス（愛知）

■Bグループ

★1回戦

日本製紙（山口）	20－1	三洋電機（岐阜）
マツダ（広島）	25－15	新日鉄名古屋（愛知）
日本耐酸壜工業（岐阜）	27－19	日本原子力研究所（茨城）

★2回戦

セントラル自動車（神奈川）	36－8	日本製紙
常陽銀行（茨城）	20－17	マツダ（広島）
豊田自動織機製作所（愛知）	26－11	住友金属和歌山（和歌山）
自衛隊久里浜（神奈川）	29－11	日本耐酸壜工業

★敗者戦

三洋電機	22－21	新日鐵名古屋
住友金属和歌山	28－12	日本原子力研究所

★3回戦

セントラル自動車	17－15	常陽銀行
自衛隊久里浜	17－16	豊田自動織機製作所

★決勝

自衛隊久里浜	23－8	セントラル自動車

[順位]

優　勝　自衛隊久里浜（神奈川）
第2位　セントラル自動車（神奈川）
第3位　豊田自動織機製作所（愛知）
　　　　常陽銀行（茨城）

スポーツ医科学委員会の機能と研究概要

スポーツ医科学委員長　西　山　逸　成

1．スポーツ医科学委員会とは

全日本チーム（NA男・女、U－23男・女、U－19男・女、U－16男・女）選手の競技力向上に必要なコンディショニングとしての体力づくり、健康管理、メンタルそしてメディカルサポートについての個人処方をチームスタッフと選手に提供するため医科学研究班、メディカルサポート班及びドーピングコントロール班の組織・機能をもっている。

2．平成13年度の医・科学研究概要

アテネオリンピック大会出場権を獲得するために必要な研究として、その主眼は、ハンドボール競技適性の見極めにもとづいた、試合場面に必要なフィットネスそしてそれらの項目の測定・評価から得られた個人別処方の追究を根底とした内容である。

（表Ⅰ、医・科学研究計画）

3．平成13年度のメディカルサポート予定

全日本チーム（男・女４種別）の平成13年度競技会や合宿の年間予定（表２）は、海外活動が延べ13回で152日間、国内活動が延べ40回で234日間の年間延活動43日で386日のNA活動を24名のスポーツドクター群と22名のスポーツトレーナー群とで競技会や合宿等に帯同して万全のメデイカルサポートを展開する態勢をとっている。

⑴各チーム種別にドクター・トレーナー群の編成を組み、選手の個別情報を共有すると共に、各地域（北海道・東北、関東、東海・近畿、中国・四国、九州の各地区）に区分しスポーツドクター所在の病院等にメデイカルサポートの拠点をお願いしているところである。

⑵メデイカルチェック制度としてJOC強化指定選手に対して、年間１回を基準として日本体育協会スポーツ診療所（10月以降は西が丘国立スポーツ科学研究所の所管となる予定）の実施する健康診断を受診する予定となっている。

⑶スポーツ医科学委員会メデイカル・メーリングリスト開設について

以上のメディカルサポートによって得られた情報を共有するためのシステムである。

医科学委員およびドクター、トレーナーの相互のコミュニケーションを深め、また選手の医科学情報の迅速な共有化のためにメーリングリストを開設する。

これにより、全日本チーム（U－16、U－19、U－23、ナショナル）の海外遠征、合宿、大会、メディカルチェックの医科学情報は、タイムラグが生じることなく各委員、ドクター、トレーナーに流れることになる。また、日本協会で医科学の全国会議を開くのは困難である。メーリングリストを活用すると、各委員およびドクター、トレーナーの意見、要望を広く把握し、話題提供などの討論を通じて相互のコミュニケーションを図ることができる。メーリングリストを活用して、より充実した医科学サポートを目指したいと考えている。（河野卓也）

4．スポーツ医・科学研究成果の活用

ハンドボールの医・科学研究成果はトレーニングや試合場面に有用な情報でなければ価値の低いものであるとの視点から、日本ハンドボール界は日本体育協会・日本オリンピック委員会との連携下で研究活動を続けてきたところである。

1960年から1994年までの研究成果を「ハンドボール競技のスポーツ医・科学研究」（競技種目別競技力向上に関する研究）（1995年11月）ならびに「ハンドボール競技（HAND BALL）コンディショニングハンドブック」（1996年３月）として発刊したが、今般1996年度以降の研究成果を「ハンドボール競技のスポーツ医・科学研究」（2001年３月）を作成し、関係各位の活用に資したいと念じている。（表３）

表１　平成13年度研究計画

	事業項目	期間	場所	事業計画
医科学研究	１）体力トレーニング【フィットネス】	５・８月	日体協	１．設定項目検討 ２．コンディショニングハンドブック印刷
	２）栄養と体脂肪	５・８月	合宿時 大会時	１．実態調査 ２．生化学検査
	３）マウスガード	５・８月	合宿時 大会時	１．男女ナショナル補正 ２．Jr. 試制作
	４）メンタルマネージメント	４・８月	合宿時 個人調査	男女ナショナル及びJr. 調査
	５）ゲーム分析	６・12月	大会時	シュート立体動作
(A)小　計				
メディカルサポート	１）メディカルチェック・体力測定	５・８月	合宿時	ナショナル 男女チームに帯同
	２）ドーピング	12月 H13．３月	大会時	ドーピングテスト アンチドーピング ドーピングコントロール
	３）メディカルサポート	４月～ H13．３月	合宿時 大会時	診療 コンディショニング
(B)小　計				
帯同	ドクター・トレーナー・帯同経費	１月～ H13．３月	合宿時 大会時	ナショナル 男女チームに帯同

表２　平成13年度　男・女ナショナルチームの帯同予定

チーム種別＼活動区分		海外 大会	海外 合宿	国内 大会	国内 合宿	小計
NA	男子		55 (3)	12 (1)	88 (16)	155 (20)
	女子	15 (1)	20 (2)	12 (1)	60 (6)	107 (10)
U－23	男子		12 (1)		8 (2)	20 (3)
	女子		8 (1)		18 (4)	26 (5)
U－19	男子		12 (1)		4 (2)	16 (3)
	女子	10 (1)	10 (1)		23 (5)	43 (7)
U－16	男子		5 (1)		2 (1)	7 (2)
	女子		5 (1)		7 (2)	12 (3)
小計		25 (2)	127 (11)	24 (2)	210 (38)	
計		152 (13)		234 (40)		386 (53)

表３「ハンドボール競技のスポーツ医・科学研究」

Ⅰ．競技種目別競技力向上に関する研究（1995～1999）
　―日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告―
Ⅱ．コンディショニング・ハンドブック
　―日本ハンドボール協会スポーツ医・科学研究報告―

2001年３月
㈶日本オリンピック委員会選手強化本部
㈶日本ハンドボール協会スポーツ医・科学委員会

（注）：申込はＪＨＡ医科学委員会（頒価2300）

2001年度
㈶日本ハンドボール協会登録にあたっての注意

㈶日本ハンドボール協会の登録業務は、昨年まで競技者についてのみコンピュータ入力をし、登録証を発行して参りました。しかし、本協会会員数を把握する上では、競技者だけでなくハンドボールに直接関係する㈶日本ハンドボール協会役員、各都道府県協会役員、各連盟役員、審判員の方々も含めて、一元的に管理することが望ましいと思われます。そこで新年度は登録管理と共に、昨年まで発行されていなかった中学生、小学生・少年団の競技者、上記役員、審判員も含め全会員に登録証を発行することになりました。

登録証には必要事項を全て記入し顔写真を貼付した上で、大会、試合に臨んで下さい。また、競技者の登録証には備考欄があり、懲罰結果を記入する欄となっております。試合において著しくスポーツマンシップに反する行為などにより失格・追放判定がなされた場合、大会裁定委員会により処分（試合出場停止など）が決定されます。これは国内の公式試合全てに適応されますので、競技者は試合出場に当たり、出場資格の確認も含め登録証が必携となります。必ず試合には登録証を携帯して下さい。

以下は、競技者の協会登録にあたっての注意です。良くお読み戴き遺漏の無いように登録手続きをされるようにして下さい。また、本協会とは別に、各都道府県協会、各連盟の登録もございます。詳細は所属団体に連絡を取って下さい。

① 登録用紙について

登録用紙は６種類、９種別用意されています。

(1)「一般L・一般Ａ」、「リージョナル」、「大学」、「高専・高校」、「中学生」、「小学生・スポーツ少年団」に区分されていますので、該当する種類の用紙で種別ごとに登録して下さい。中学生、小学生については競技人口把握のために行うものです。なお、JOCカップなど全国大会に出場するためには、チームおよび個人の登録が必ず必要となります。ご面倒ですが、ご協力よろしくお願いいたします。

(2)種別の異なる登録用紙を使用して、他の種別の登録は出来ませんのでご注意下さい。また、年度内にチームの種別を変更することは出来ません。

(3)登録用紙は選手数が多い場合に裏面にも記載できます。但し、裏面を使用した場合は、「副」、「写」のコピーは<u>両面コピーをして「正」と同様に１枚の用紙にして下さい。</u>

(4)登録用紙は、日本協会ホームページ(URL http://www.handball.or.jp/)から、ファイルをダウンロードして使用しても構いません。但し、「一太郎８」、「Word98」のみしか用意しておりませんので、対応できない場合は各都道府県協会より配布を受けて下さい。

② 登録規定第２条にしたがって

チームおよび個人（チーム役員および選手）は日本協会に登録して下さい。登録を行わなければ日本協会、各都道府県協会、または各連盟が主催、共催する大会にチーム役員（部長、監督、コーチ、トレーナー、ドクター、マネージャー、主務）および選手として参加することは出来ません。また、チーム役員であっても選手として参加する場合は選手の登録もして下さい。

③ 種別について

(1)「一般Ｌ」について
日本リーグ加盟チームのことで、すべての大会に参加資格があります。

(2)「一般Ａ」について
日本リーグ以外のすべての大会に参加資格があります。

(3)「リージョナル」について
都道府県内での大会のみ参加資格があります。「リージョナル」種別のチームに登録した選手は、国民体育大会（予選を含む）に参加資格はありません。

(4)大　学
全日本学生連盟に加盟し、日本協会に登録したチームおよび個人を指します。これ以外の大学生は、「一般Ａ」または「リージョナル」登録となります。

(5)高　専

全国高等専門学校体育協会ハンドボール競技専門部に加盟し、日本協会に登録したチームおよび個人を指します。これ以外の高専学生は、「一般Ａ」または「リージョナル」登録となります。

(6)高　校

全国高等学校体育連盟ハンドボール部に加盟し、日本協会に登録したチームおよび個人を指します。これ以外の高校生は、「一般Ａ」または「リージョナル」登録となります。

4 日本協会登録料

種　別	一般L	一般A	リージョナル	大　学	高専・高校	中　学	小学・少年団
チーム	620,000円	30,000円	3,000円	16,000円	9,000円	0円	0円
チーム役員＠＊	2,000円	2,000円	2,000円	2,000円 ＊＊ 学生500円 ＊＊＊	2,000円 ＊＊	2,000円 ＊＊	2,000円 ＊＊
選 手＠＊	1,000円	1,000円	300円	500円	0円	0円	0円

＊　登録締め切り後の個人(チーム役員及び選手)の追加登録料は、登録時と同額です。

＊＊　同一学校の男・女両チームのチーム役員を兼任する場合は、登録料を１チーム分のみとする。同学校の学生(生徒、児童)をチーム役員として登録する場合は、登録料を選手と同じにする。

＊＊＊同大学の学生が選手とチーム役員を兼任する場合は、１名分の登録料（500円）のみでよい。

5 登録用紙作成数、提出および期限について

各チームは登録用紙を必ず「正」、「副」、「写」の３部(「副」、「写」は「正」のコピーでよい）作成して、「正」、「副」の２部を所属の都道府県協会の指定する日までに提出して下さい。なお、「写」は控えとしてチームで保管して下さい。裏面を使用した場合は、「副」、「写」のコピーは両面コピーをして「正」と同様に１枚の用紙にして下さい。

6 個人の登録チーム数について

(1)チーム役員は複数チームに登録できます。但し、登録料はそれぞれにかかります。特例として、同一の学校（大学、高専、高校、中学、小学）において男子・女子両チームのチーム役員を兼任する場合は、登録料を１チーム分のみとします。

(2)選手登録は１人１チームのみとし、複数チームに登録(重複登録）できません。重複登録は登録規定により懲罰の対象となります。但し、国民体育大会、その他、特別の選抜チームの登録については別に定めます。

7 国体一時登録について

日本協会登録用紙で登録手続きをされたチームが１人以上補強して国民体育大会へ出場しようとする場合は、国体一時登録をする必要があります。但し、構成メンバーの年齢は、登録用紙の記載いかんに関わらずすべて「国民体育大会規定」の適用を受けるものとします。

8 登録証の発行について

(1)すべての種別のチーム役員、および「一般Ｌ」、「一般Ａ」、「リージョナル」、「大学」、「高専」、「高校」に登録した選手には、登録証を発行します。有効期間は当該年度末までです。紛失などで再発行する場合は、事務処理費として500円のご負担をいただきます。

(2)登録証は日本協会に登録されたことを示す重要なものです。各種大会で登録証の提示を求めることがありますので、試合の際は必ず登録証を持参して下さい。登録証の保管・所持には十分ご注意ご配慮をお願いします。

9 チームの新規登録について

新設（新規）チームの場合は、登録締切以降でもその都度登録を受け付けます。但し必ず各都道府県協会を経てお送り下さい。新設チームとは前年度に日本協会登録をしていないチームのことを言います。

10 チーム役員および選手の追加登録(新規)について

チーム役員および選手の追加登録はその都度認められます。追加登録は大会申込期日までに、各都道府県協会を通じて完了されていなければなりません。所定の届け出用紙に必要事項を記入し所定の追加登録料と共に、各都道府県協会を通じで日本協会へ提出して下さい。日本協会が受理した日をもって有効とします。

11 選手の追加登録(移籍)について

(1)当該年度にチームに個人登録し、そのチームをやめ、他のチームで再び競技をしたい場合は登録を抹消し、追加登録（移籍）をしなければなりません。

(2)追加登録（移籍）の１度目は、当該年度内のいつでもできます。一度追加登録（移籍）をした場合は、当該年度２番目の登録チームに３カ月間在籍しなければなりません。３カ月経過しなければ２度目の追加登録（移籍）はできません。

(3)追加登録（移籍）をする場合は、所定の届け出用紙に必要事項を記入し所定の追加登録料と共に、各都道府県協会を通じて日本協会へ提出して下さい。日本協会が受理した日をもって有効とします。

⑫ 登録抹消について

所属チームをやめる場合は、登録抹消手続きをする必要があります。所定の届け出用紙に必要事項を記入して、各都道府県協会を通じて日本協会へ提出して下さい。日本協会が受理した日をもって有効とします。

⑬ 登録用紙記入の際の注意事項について

登録用紙に記入する際は、下記事項に注意し正確に記入して下さい。なお、前年度の登録一覧表（但し全項目は入っていない）を各チームに配布しますので、ご参照下さい。この説明書はすべての種別に共通に作成してありますので、登録用紙に見あたらない項目の説明もあります。その場合は読み飛ばして下さい。

(1)新規・継続、種別、男女別欄および加入連盟は該当に○印を付けて下さい。

(2)所属都道府県の欄にはチームを登録する都道府県名を記入して下さい。

(3)登録役員数および登録選手数欄には、登録する個人の合計数を記入して下さい。

(4)登録役員数欄の（内兼任　名）および（内学生　名）には、該当する人数を記入して下さい。

(5)チームNo.、チーム名（学校名）は前年度に登録がある場合は同じNo.、名称にして下さい。チーム名を変更する場合は、別途「チーム名変更届（理由書）」（書式任意）を添付して下さい。

(6)代表者欄は、チームを代表される方（校長、部長、監督、指導者など）の氏名をお書き下さい。また、必ず捺印をして下さい。(7)チーム（学校）所在地を記入して下さい。

(8)「大学」は、"大学承認印"を必ず用紙右上所定欄にうけて下さい。

(9)連絡先欄は、日本協会登録証や各種通信物が確実に届くところを正確に記入して下さい。担当者名、送付先団体名が必要な場合は、必ず記入して下さい。機関誌送付先が連絡先と異なる場合は、機関誌送付先も正確に記入して下さい。もし登録後に転居などで住所を変更される場合は、速やかに日本協会および都道府県協会に連絡をして下さい。

(10)各箇所のフリガナ欄には必ずカタカナで記入して下さい。郵便番号（〒）は必ず新7桁番号を記入して下さい。住所欄への都道府県名記入は不要です。

(11)すべての種別のチーム役員、および「一般L」、「一般A」、「大学」に登録した選手は特にコンピュータ入力をし、登録No.で個人管理を行います。登録No.は生涯個人No.となります。前年度に発番がない場合、または、今年度、新規に登録するチーム役員および選手は番号欄に（新）と記入して下さい。役職欄は部長、監督、コーチ、トレーナー、ドクター、マネージャー、主務がこれに該当します。但し、「役職名」はチーム状況把握のために行うもので、この「役職」で登録を規定するものではありません。従って、それぞれの大会規定に従い役職名を変更することが出来ます。

(12)「大学」、「高専・高校」、「中学生」、「小学生・スポーツ少年団」に登録するチーム役員の内、同一学校の男子・女子両チームのチーム役員を兼任する場合は、役職欄に"監督（兼）"のように役職名の後に"(兼)"と記入して下さい。また、登録料の免除を受ける側の登録用紙の現住所欄に、住所を記入せず"男子チームで支払い"のように記入して下さい。

(13)「大学」、「高専・高校」、「中学生」、「小学生・スポーツ少年団」に登録するチーム役員の内、同学校の学生、生徒、児童の場合は、番号に○をして下さい。

(14)「大学」に登録する学生チーム役員の内、選手と兼任する場合は、チーム役員欄に記入せず、選手欄の番号に○をし、番号左外欄外に「役職名」を記入して下さい。

(15)選手欄の通し番号はユニフォーム番号とは関係ありません。上から詰めて記入して下さい。

(16)過去に登録した個人が新規に登録をし、新たに登録No.を取得すると重複登録としてリストアップされます。重複登録は登録規程により懲罰の対象となりますので、間違いのないようにご注意下さい。特に、種別が変わる(大学→一般Aなど)、移籍などは、前年度(過去)の個人No.を確認し記入して下さい。

(17)生年月日は西暦で記入して下さい。昭和の場合は年号に25を足せば西暦下2桁になります。

(18)「契／非」欄はIHF規定に基づく選手契約の有無についてです。該当を○印で囲んで下さい。

(19)勤務先は出来るだけ詳細に記入して下さい。
例：○×(株)、●▼高校教員、◇◆大学□学部△年

(20)平成12年度とやま国体に出場された方（都道府県大会及びブロック大会を含む）は、「国体出場都道府県名」を記入して下さい。

⑭ 連絡先、機関誌送付先変更について

連絡先、機関誌送付先を変更する場合は、速やかに日本協会および各都道府県協会まで必ずご連絡下さい。なお、機関誌年度は、平成13年7月～14年6月（1月は休刊、年11回発行）で、通常の年度と異なります。3、4月の転勤・転居などの際は特にご注意下さい。

⑮ ご不明な点は

最寄りの都道府県ハンドボール協会または(財)日本ハンドボール協会（〒150-8050　東京都渋谷区神南1－1－1　電話 03-3481-2361）へお問い合わせ下さい。

事務取扱い責任者会議

日時 平成13年2月25日(日)13:00～16:00
場所 青山メトロ会館 402会議室

日本協会出席者：斉藤常務理事　川上常務理事　江成常務理事　喜井常務理事　村松常務理事　佐分理事　松原参事　兼子参事　笹倉指導委員長

【議事】

1. 平成13年度登録について

平成13年度からは、協会・連盟役員、審判員にも登録証を発行する。

登録関係の書類は各事務局に発送済み。

注意点は次の通り。

・中学生、小学生にも登録証を発行する。
・登録区分、料金表の一覧表を配布してあるので、確認してください。
・審判、競技者については変更はない。
・ビーチ、マスターズチーム登録は、都道府県協会は通らない。開催地で徴収。
・評議員は都道府県協会での登録となる。

登録証について次のような説明があった。

・2種類増え、合計5種類となる。だいだい色とピンクであり、都道府県役員と審判員の分にあたる。IDカードへの転用可能であり、大会での活用工夫が要望された。
・競技者の登録証は、備考欄を設け、ゲームでの失格を記入する。
・小学生、中学生にも発行することについて、発行の方法は、小学生、少年団も登録した時点で発行できる体制である。登録証を発行するように都道府県協会に依頼がいく。これに伴い、競技者数を増やすためにも登録の促進を図って欲しい。ブロック、全国大会では、未登録の選手は、追加登録できるように主催者に依頼していく。
・小、中、高は個人登録料無料であり、より一層の登録推進が依頼された。

平成13年度からの都道府県協会運営補助金について次のような説明があった。

・各都道府県協会の活性化のために行う。都道府県役員登録総額を積算基準にして、その15％を運営補助金として交付する。交付したものは、都道府県協会の予算に組み入れるようにして欲しい。

審判登録に関して次のような確認がなされた。

・今年度から毎年更新となった。アプラスを通してやっていたが、昨年から従来の一括方式にした。5／1～31の期間で登録をすませるようにする。昨年は50％程度の遵守状況だった。審判員登録は、期日までに登録が完了しなかった都道府県は、公認審判員がいないと判断する場合がある。公式試合の開催ができない状況もあり得ることが確認された。
・審判員の服装と審判着についての確認があった。

2. がんばれ10万人会について

会員について全国各都道府県で入会者があった事の報告があった。

事務手順の変更について説明があった。さらに、都道府県への還元金について、会員数によって還元額を変えていくこと、5月末で、各協会に還元金を振り込む予定であることが確認された。

3. 国内・国際事業日程について

日程表について

4.その他、関連事項

①指導者養成について

別紙により、公認資格取得者状況が報告された。

C級スポーツ指導員養成講習会の実施報告、来年度の実施予定が報告された。

今後の予定として、2002年にB級コーチ養成講習会、2004年・2006年にC級コーチ養成講習会を実施する予定。

②競技運営について

国体での、指導者の有資格者制度導入完全実施は2007年であり、日本体育協会に申し出済みである事が確認された。

モルテン新ボール(松ヤニを使わなくてもグリップできる)の検定済みの件、IHFで許可済みである事が報告された。

トスに関して、試合の30分前であったのが、チーム挨拶後、試合開始直前に行うことに変更され、キャプテンが行うことが確認された。

③大会における失格、追放について

報告書当日提出→裁定委員会開催：当日審議→処理決定→試合前に提出済みの登録証で本人を照合。当該選手の登録証預かり記載→当該裁定委員会から協会へ報告→日本ハンドボール協会の懲罰委員会（場合によって）マッチバイザーと裁定委員会の掲載のあるプログラムを作成するように。

事例については後日連絡する。

④国体の夏季大会への移行について

要望事項とあわせて、日本体育協会に移行について回答を依頼した。2007年の秋田国体から予定されることの報告あった。

⑤大会運営についてのマニュアル作成は、進行中である。

⑥大型退場者掲示機を作成、全国各大会へレンタル（有料）予定であり、8基作成し、プレーオフから使用開始の予定であることが報告された。

⑦ユニフォームについて：背番号の表示が見にくい。番号が見やすいように各協会から各チームに依頼するよう要望された。1～20番までを励行すること、ユニフォーム広告は、協会に広告料を払えば可能であることが確認された。

⑧競技の健全化について

全日本総合の反省から、日本リーグの各チームはもちろん、全国各チームに健全化への協力が依頼された。

⑨各種国際大会への支援を各協会に協力依頼があった。

⑩国体のブロック大会の日程が確認された。

⑪秋田のWGでの、ビーチハンドボールは第1回の世界選手権となる。資金などの協力が依頼された。兵庫で全日本大会が開催される(8/4、5)ことが報告された。

⑫クラブ選手権大会開催について検討中であり、西地区の会場が未定である。

社会人連盟設立が検討されており、将来的には日本選手権への発展の可能性があることが報告された。

みやぎ国体について、諸日程の確認があり、また会場として全天候型グラウンドも併用予定であることなどが報告された。

国体の夏季大会移行（予定）に伴い、2007年以降の会場予定地選定で、会場の準備について注意が促された。

NTSに関連して、都道府県の技術委員選出について案内を送付済みであり、再度連絡をするよう依頼された。

審判部より、ルール改正について、国際的には2002年8月から、日本では2003年4月から実施予定であることが報告された。

平成12年2月度 常務理事会

日　時　平成13年2月10日（土）
　　　　午前10時00分～12時00分
場　所　青山メトロ会館
出席者　中澤副会長、山下専務理事代行、常務理事7名、理事1名、参事3名、監事1名、事務局2名

審議事項

1. 平成13年度事業計画（案）について

1月に引き続き検討、承認。

2. 平成13年度予算（案）について

1月に引き続き検討。収入の部の一部修正を認め、特別会計事業別予算を承認。

3. 登録金の値上げ、登録区分の変更について

各種登録について、一元化処理をし、登録証を発行する。以下の事項について報告があった。

加盟団体役員登録に関して、各協会活性化のために、都道府県協会運営補助金を交付する。

審判登録金の事務手数料を控除した額で一括して日本協会に振り込む。

一般登録等に関して、登録金等検討委員会を設置し、6月をめどに協議する。

マスターズ、ビーチハンドボール登録制度について承認。

登録証の使用方法について変更を了承。

東アジア競技大会予算について、JOC委託金の絡みを見て、大阪協会と協議し、必要に応じて補正予算を計上することとした。

ワールドゲームズ（秋田）について、日本協会として予算措置をとることを決めた。

4. 平成13・14年度日本協会役員人事について

第3回理事会の意見を尊重して、評議員会へ提案することとした。

5. アテネ特別強化委員会について

2月8日に、アテネオリンピックに向けての強化施策についての記者発表があった。マスコミ各社20名の出席があり、翌日の各社朝刊に掲載された。アテネ強化対策について委員会会長と意見交換を行うこととした。

平成12年度 第3回全国理事会

日　時　平成13年2月10日（土）
　　　　13時00分～16時00分
場　所　青山メトロ会館402会議室
出席者　中澤副会長、山下専務理事代行、常務理事8名、理事6名、参事9名、監事2名

報告事項

1. 平成13年度の国内外大会の日程・実施計画について

主要大会の実施計画の他、次のような追加報告があった。

西日本学生選手権大会
　8/8～12 福岡市
全日本教職員大会
　7/25～27 愛知県豊田市
JOCジュニアオリンピック
　12/25～27 大阪府家原体育館他

2. がんばれハンドボール10万人会について

入会者が、全都道府県に及んだとの報告があった。

都道府県協会還元金に関し、会員数によってその還元率が変わることが報告された。

また、募集状況、会員サポート体制について報告があった。

3. 普及特別委員会について

資格の義務づけについて、富山国体から、国体チーム役員は有資格者が望ましいと大会要項に加えられたことが報告された。

全国の資格取得者一覧が提示された。

4. ワールドゲームズ・ビーチハンドボールWCについて

秋田での開催が、第1回ビーチハンドボール世界選手権大会となることが報告された。

ビーチハンドボールの強化とあわせて、全日本大会を兵庫で8／4、5開催することが報告された。

5. 平成13年度の登録について

登録業務についての確認があった。

平成13年度は、チーム、チーム役員、選手、公認審判員、日本協会役員、都道府県協会役員、10万人会、公認コーチの8区分で登録証発行の予定。

登録証がなければ試合ができない旨、確認された。

6. 東アジア競技大会について

組織図が提示され、日本協会・大阪協会の各担当者が報告された。

運営に関する情報として、各国のエントリー状況、日程、会場（大阪住吉体育館）について報告された。

7. ゴールとボールの検定について

ボールに関して、モルテンより人工皮革で、松ヤニを使わなくても握りやすいものが開発され、協会として検定承認したことが報告された。

ゴールはエバニュー製のものが認定された。

8. 競技の健全化について

競技中をはじめ、大会開催中のスポーツマンシップに反する行為のないよう全国のチームに注意喚起をしたことが報告された。

9. アテネ強化特別委員会について

全日本強化のために、若手選手を欧州のプロリーグに派遣、国際強化試合の開催について報告があった。また、スペインカタルニャ協会に日本協会の欧州拠点を設けたことが報告された。

10. その他

・審判部より、オフィシャルユニフォームの着用、審判登録期日の厳守、レフェリーの倫理綱領の申し合わせがあった。

・大阪オリンピック招致活動に関して、IOCの評価委員会来日と大阪市中央体育館の視察があるとの報告があった。

・退場者表示板の普及について報告があった。

審議事項

11. 平成13年度事業計画について

各事業部、委員会より事業の基本方針、および重点方針が示され、承認された。

平成13年度事業計画参照。

12. 平成13年度予算案について

収入に関しては、事業収入が前年度並み、積立預金の取り崩しによる変化がある。

特別会計からは、10万人会からの繰り入れが減少することが報告された。

支出に関しては、一般会計の予算を圧縮し、各事業計画の効率化をはかった。

13. 登録料の値上げについて

平成14年度の登録金に関する検討委員会を設置し議論を深めていく。

平成13年度は、ビーチハンドボールとマスターズ大会で、チーム登録金を徴収する。

一般Bを復活し、ブロック大会まで参加できるようにする。

14. その他

競技運営に関してトスの方法の変更について、国体に関しては、秋季大会から夏季大会への移行について国体委員会に提案することが諮られ、承認された。また、NTSに関してブロック委員を選出協力依頼があり、承認された。

「がんばれハンドボール10万人会」2月入会・更新者の紹介

[青森] 川島卯太郎
[宮城] 高橋長偉
[山形] 高野勇
[茨城]
坂一典、大村久
[神奈川] 田村修治
[長野]
中澤正己、中澤咲子、
中澤正幸
[石川]
米谷恒洋、米谷半平、
寺垣俊秀
[三重]
岩井正樹、栗本士郎、
岩井紘子、岩井つや子、
岩井智美、岩井美穂、
岩井啓子、岩井紘治、
儀賀美智子、薮下由紀子、
小村貴子、辻猛、
辻淑子、三輪敞理、
後藤京子、後藤等、
須平輝美、岩井薫子、
岩井雅洋、谷元一己、
安藤拡光、林将夫、
高橋美由紀、村山津也子、
永田隆雄、野々上宏、
大関隆義、矢野充彦、
堤勝也、堤明宏、
大塚智浩、安井治久慈、
高橋良輔、堀田和之、
池辺健二、松延弘樹、
羽賀太一、笹浪重俊、
山川敬止、山本秀明、
佐々木教裕、フレデリック・ボル、
ステファン・ストックラン、
山村敏之、阿部展行、
北島孝彦、市川里美、
鈴木信次、加藤圭介、
広政宜孝、吉井文晴、
上村宗男、谷口了、
日原正和、長谷川貴洋、
斉藤泰貴、鶴見拓、
四方篤、櫛田亮介、
関根和彦、尾上良生、
三本松俊雄、三本松雅也、
長谷川裕、米村昌一、
粟屋敏則、粟屋梓、
粟屋由貴絵、粟屋慎吾、
大河原一、市瀬勉、
矢賀誠、瀬戸麻里、
清水実、堤孝樹、
堤綾子、堤政近、
堤尚子、吉見ゆかり、
丹羽昭文、立木浩二、
立木真由実、坂本優子、
荒木誠二
[京都] 片山健史
[鳥取] 小澤敏正
[愛媛]
堀内佐波、長野真太郎、
園部千鶴、佐々木千絵、
國和千歳、向井靖人、
戸梶良子
[大分] 渕健児

全日本学連平成12年度優秀選手

[男子]
篠崎純一(函館大)
千葉伸彦(東北福)　岩倉大介(金沢工)
古田稔(中央大)　千石栄治(筑波大)
高木尚(日体大)　佐藤豪洋(中央大)
近藤康人(日本大)　作田幸治(日本大)
澤田俊祐(国士舘)　小倉学(日体大)
亀田敦(中央大)　窪小谷貴裕(日体大)
比嘉律(日体大)　太田芳文(日体大)
前田誠一(日体大)　豊田賢治(国士舘)
宮崎大輔(日体大)　蔵野大輔(名城大)
横地康介(名城大)　中谷哲也(中部大)
西村和也(中部大)　柳本義文(日体大)
吉田耕平(大体大)　東慶一(大体大)
加藤淳也(大体大)　会澤信道(大体大)
四宮英伸(大体大)　佐古敦士(広島大)
松村昌幸(福岡大)　畠中益喜(福岡大)
以上31名

[女子]
成田由美子(浅井学園大)
田村志穂(東北福)　宮崎真奈美(金沢大)
宮城智枝(茨城大)　安達多華美(筑波大)
内山かほり(国士舘)　山田永子(筑波大)
早船愛子(筑波大)　佐藤由香(東女体)
柴田真由実(東女体)　小野澤香里(国士舘)
金城晶子(武庫川)　鈴木正子(茨城大)
徳永さつき(日女体)　橋本寛子(東女体)
森本美奈子(筑波大)　上町志織(国士舘)
北井祥子(日女体)　太田智子(筑波大)
藤本沙代(中京女)　勝田祥子(武庫川)
中村尚美(武庫川)　坪井美帆(大教大)
倉益好美(広島大)　藤崎貴子(福岡大)
谷川若菜(福岡大)　道越さやか(福教大)
木村妙子(福教大)　北三紀子(福岡大)
以上29名

[4月の行事予定]

[会議]　★常務理事会／4月21日(土)　東京

HAND BALL CONTENTS APR

柔らかな感触で、最適なバウンド！

新発売

PKCH3-AD DX
5,500円

PKCH2-AD DX
5,400円

PKCH1-ADJ
3,600円

手縫い・国際公認球

KCH3-AD
4,600円

PKCH2-AD
4,500円

PKCH2-ADR
2,700円

PKCH3-ADR
2,800円

(財)日本ハンドボール協会編 『ハンドボール』 第四一七号

昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可 平成十三年三月二十六日印刷 平成十三年四月一日発行

東京都渋谷区神南一—一—一
電話 代表 三四八一—二三六一
振替 〇〇一二〇—七—一〇二九三

編集兼発行人 市原則之

価格は登録金に含む